あの子が消えた日

ゆっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの子が消えた日

【Ｎコード】
Ｎ５４９７Ｏ

【作者名】
ゆっこ

【あらすじ】
親友がいなくなった。あたしは彼女を取り戻してみせる。
※一応、恋愛要素もありますが、とっても薄めです。

一話目（前書き）

短めの話になる予定です。

……予定だったんですが、中編くらいになりそうです。すみません。

一話目

風呂を済ませ自室に向かう途中、よく聞き慣れた音が隣で鳴った。今は母が風呂に入っていて、父は出張中だ。面倒臭いと思いながらも手を伸ばす。

「はい」

『もしもし、今晩は。南ミナミです……由香里ユカリちゃん？』

ピッとボタンを押して出た家の子機。いつ振りかの感触に、携帯電話の方が馴染んでしまったなと思った。

「はい、由香里です。もしかして、佳奈カナのおばさん？」

『そうよ。こんな夜遅くにごめんなさいね。今平気かな』

そう言われてちらっと廊下の掛け時計に目が行く。まだ9時半だった。

「別に大丈夫ですよ。母に代わりますか？」

よく分からないが、ＰＴＡや学校行事の何かかと思いそう聞く。佳奈の母親とはそれなりに仲が良かったが、娘である佳奈がいるからこそで、電話もあたし宛てには一度も無かった。

『ううん、由香里ちゃんに聞きたいことがあって電話したから……』

「え、そうなんですか？　どうしたんですか？」

じゃあきっと娘の佳奈のことだろう、と思いながら聞き返す。友人の親からなにやら相談されるというのは、少し不思議な気分だった。

『その……、佳奈、今そちらに伺ってない？』

少し歯切れ悪く言われた言葉に、瞬時に嫌な気持ちになる。別に質問に対して無礼に思ったとかそういうのではなく、その内容に不穏な響きがあったからだ。

「佳奈とは昼に会って遊んで、七時前には別れました。……あの、何かあったんですか？」

『七時……。あのね、あの子まだ家に帰ってこないの。いつもは八時頃の晩御飯には絶対居るのに……』
ぞわりと背筋が震える。嫌な考えしか浮かんでこない返答に、鼓動が著しく速くなる。
「ま、まだ遊んでるんじゃないですか？　ほら、佳奈ももう、高二だし……」
自分の声が尻窄まりになっていくのを止められなかった。彼女はあたしと違い、親に心配かけてまで遊び回るような子じゃない。反抗とは無縁のおとなしめの素直なやつだ。
『そうね、そうだといいんだけど……』
あたしの馬鹿。不安にさせてどうする。
小さくなったおばさんの声。失態に眉を寄せながらも、明るく振る舞う。
「大丈夫ですよ！　きっと遊びまくってて時間忘れてるだけですって。……あっ、そうだ。携帯にかければいいじゃないですか！　佳奈、ちゃんと昼は持ってましたよ」
『……つながらないの……』
ついにおばさんの涙声が漏れた。あたしはまたやらかしてしまった失敗に自分を殴りたくなった。
携帯なんてそりゃあ真っ先に試すわな、と心で舌打ちし、とにかくこのまま話しているだけでは彼女の傷口を更に抉るだけだと早々に切り出す。
「大丈夫だよ、おばさん！　あたしも今から心当たり探して来ます。きっとそこら辺にいるだろうし。待っててくださいね、すぐ引っ張ってきますから！」
『駄目よ！　こんな夜遅くにあなたにまで何かあったら、』
「ヘーキですって！　いつもはもっと遅い時もありますから。それに防犯ブザーや護身用の武器も持って行きますし。あとあたし空手習ってて実は超強いんですよ」
正確には習ってた、で、しかも素人同然の兄貴からダイエットが

てらで、尚且つ三日坊主で止めてしまった体たらくで、喧嘩なんて全く出来なくて、いつも兄貴に突然かけられるチョークにも全く反撃出来ない激弱ぶりだった。だがあたしはもちろん言わない。電話越しにへらへら笑いながら続ける。

「クラスの男子より断然強いんですから。でも念のため親や兄と探すからほんと大丈夫です。安心してください。……じゃあ、探しに行きますね」

おばさんはごめんなさいとお願いしますを繰り返していた。その震える声は、胸に深く突き刺さる。

「あのバカ、なにやってんだ」

苦々しい顔をしながらも、あたしの足は動き出していた。

二話目

母にはコンビニに行くと言った。友人がいなくなった等と言えば、逆に家から出してもらえないと思ったからだ。

別段気に入ってもないＴシャツに着古したジーンズ、風呂上がりだからスッピンのままで髪も湿ったまま、靴は走りやすいようにスニーカーという出で立ち。普段ならこんな恰好で外に出るなんて狂気の沙汰、死んでも嫌だった。でも、今はあまり気にならない。

――佳奈。

何処にいるのか全く分からなくて、とにかく彼女の名を雑踏の中で呼ぶ。いつもは学生で賑わっているこの場所も、今は仕事帰りだろうＯＬやサラリーマンが大多数で、若い人はパラパラと疎らだ。そんな中を駆け歩きながら呼び回るあたしを、幾人かがこちらを見てすぐに目を逸らす。あたしはチクショウ、と小声で悪態をついた。

人見知りで引っ込み思案の佳奈は友達が少なかったし、多分親友と言える間柄なのはあたしだけだと自負している。一応虱潰しに携帯に登録されている番号に一通り電話してみたけれど、知らなーい、と脳天気に返されるのがオチだった。

それだけではない。カラオケ、ファーストフード店、喫茶店、雑貨屋、一度しか行かなかったボーリング場にまで足を延ばしたが、彼女の顔と名前に引っ掛かりを覚える店員は皆無だった。

「佳奈っ」

ちらりちらりと変人を見るかのようにあたしを見ては、三秒とせずに視線を外す人々。自分の恰好を思うと羞恥が込み上げてきそうだったが、やはりそんな小さなものよりも、莫大な不安が胸の内を占めていた。

幼稚なとこがあって、ちょっとズレてて、でもとても優しい。あんな子、騙すなんて簡単だ。そこらへんのナンパ男くらいなら処女

喪失で済むかもしれないが、世の中には危ない奴なんてゴロゴロ転がっている。否、ナンパ男ですら危ない。避妊用具を使わずにセックスすれば、病気に妊娠でジ・エンドだ。自分だけは大丈夫だなんて、今時中学生でも思わないだろう。多分。

「佳奈ぁ～っ」

なんだかあたしが泣きそうになってきた。不安で不安で爆発しそうだ。さすがに泣きながら走っていたら、誰かに警察等に連れて行かれそうだ。どこか店と店の隙間にでも入って少し泣いて落ち着こう、と踵を返そうとした。

その時。

「っ……佳奈！？　待ってっ」

歪みかけた視界の端に映ったのは、よくからかっていた若干右に撥ねた焦げ茶のくせっ毛。急いでその姿を追い掛け、届いた掌で肩を思いきり掴む。

「あんた、何して――っ」

振り返った顔は、見ず知らずの他人だった。驚いたように目を大きくしてあたしを凝視している。あたしは胸に広がった安堵が一気に萎むのを感じた。

「あ……すいません」

「いえ、別に……」

戸惑いながら去っていく少女の背中を見て、髪以外は全く似てない事に気付く。佳奈はもう少し背が低かったし、平気だと進めるあたしに、腕が太いからと恥ずかしがって肩から先全部出た服を着ていたことなんて一度もなかった。

「……ぅっ、く」

今度こそ視界が歪む。一度感じた希望を打ち砕かれ、一気に身体の力が抜けていくのを感じる。小さく溜息をつき、伝う涙を拭う。

「帰ろう……」

折角風呂に入った身体は大量の汗を噴き出し、入る前よりも汚く感じた。でももう風呂に入る気力なんか無い。あの子が見つかって

ないのに、あたしだけが家に帰ってのうのうと湯舟に浸かるなんて出来ない。

叫びすぎた喉は痛み、二時間程動かし続けた足は、時折筋肉が痙攣して気をつけないと攣りそうだった。それでも溢れる涙を家に帰る前には止めなければならない。あたしは大きく鼻を啜った。

三話目

家に着くと、さすがに遅すぎたのか、母が仏頂面をして待っていた。あたしはコンビニで立ち読みに夢中になってたと嘘をつき、母の横を通り過ぎようとして腕を掴まれた。

「あんた――」

母親の独特の低い声に背筋が震える。嘘がばれた、と瞬時に思った。この暗い顔せいか、または泣きすぎて腫れぼったくなってしまった瞼か。恐々と母を振り返ると、母は目尻を吊り上げて言った。

「汗くさい！」

そのまま風呂に押し込まれ、臭いを落とすまで出るなと厳命される。潔癖な母のせいでこんな所まで思い通りにならない。あたしはシャワーを最大まで捻って、また少し、泣いた。

着ていた服はとっくに洗濯機に放り込まれていて、代わりに用意されていたパジャマを着て部屋に戻る。自室の扉を後ろ手で閉めた瞬間、大きな溜息が出た。

「おばさんになんて言おう」

見つからなかった～、なんて簡単に言えない。娘に似て内気な感のある彼女は、きっと娘と誰よりも仲良く遊んでいたあたしを頼っている。

勿論いい大人が、なんて毛ほども思っていない。母子家庭の彼女には、仕事と子供の全てをを抱え込み、頼る相手が少ないのだ。

それにあたしの推測だが、おばさんは信頼出来る友人がいないんだと思う。彼女の過去は佳奈から聞いたことがある。

佳奈曰く、彼女の旦那さんは家族不在の時間を見つけては、堂々とデリヘルを頼んでいたそうだ。それが発覚し、大喧嘩になった末

離婚。しかしその際、旦那は離婚届けを書く前に全てをほっぽりだして、よく指名していたヘルス嬢と共に駆け落ちしてしまいそのまま行方不明。当然おばさんは心に大きな傷を負い人間不信になった。佳奈は、彼女がそれを未だ引きずっていると言う。

そしてそれを見てきたからか、佳奈自身あまり男性には自分から近付こうとはしなかった。

だからと言ってあの子が今まで男性関連で危ない目に会ったことが無いと言ったら嘘になる。あの子は本っ当に騙されやすいのだ。

可愛いね～ちょっと一緒にカラオケとか行かない？　くらいなら佳奈はすっぱり断った。だが、あれ、どこかで会った？　久しぶりじゃ～ん俺のこと忘れちゃったの酷いなじゃあちょっと遊ぼう、だとか、すいません財布落としちゃって、お金を貸して下さい、だとか、娘が生理になってしまったので生理用品下さい、だとかには戸惑いながらも誠意を持って対応しようとした。

そんな姿が微笑ましいんだけど同時に苛立ちと呆れを果てしなく感じた。生理用品くらい目の前にある薬局でテメーが買え！　と叫べばいいものを。守ってあげなきゃこの子は拉致されるな、と常日頃から思っていた。――いたのに。

「佳奈……」

明日は学校をサボって探そう。そう決心し、なんとか気分を落ち着かせる。泣きながらおばさんに電話なんかかけられない。

あたしは携帯の登録から佳奈の家の方の番号を引き出す。ついでに登録しといて良かったと心底思う。こんな時間に家の電話の番号履歴をコソコソ調べていたら確実に親に怪しまれる。

一度大きく深呼吸してから、ボタンを押す。ワンコールもしない内におばさんが出た瞬間に、また泣きそうになった。

『もしもし』

「おばさん、由香里です」

『由香里ちゃん！？　あのっ、佳奈は……っ』

「……すいません、見つかりませんでした」

ごまかすことも出来ず、有りのままを言う。今の状況でそんなことをやってのけるスキルは持ってなかった。
「でも、明日も探します。絶対どこかにいるもん。絶対見つけます」
自分に言い聞かせるようにおばさんを勇気付ける。しかし、やはり彼女は浮上しなかった。
『おばさんもね、さっきまで色んな所探してみたの。でも、いなかった、いなかったわ』
震える声が痛々しい。あたしまで震えてしまいそうな唇をきつく噛む。
『あの子が行きそうな所は全部回ったの。学校に連絡して、三組の先生にもお話したわ。そしたら、高校生にはよくあるって。わたしは過保護だって……』
ちくしょうあの野郎、ふざけんな。
担任のすました顔を思い出し、憤りのあまり手近のクッションを思い切る投げる。
『明日警察に行こうとも思ってるんだけど、あの人の時と同じ対応をされると思うと、とても怖い……』
あの人、とは別れた旦那さんのことだ。これも佳奈から聞いた話だが、彼が消えた時に勿論警察に捜索願を届けたのだが、書類や口頭で根掘り葉掘りプライベートを聞かれ、やっと終わればそのまま放置。なんでも、警察は事件性がないと動けないらしい。
離婚自体はしてないので母子援助も受けられず、お金と時間を離婚することのみに費やし、苦しみに喘ぐ彼女に手を貸してくれない警察や周囲にとても失望したそうだ。
確かに、いちいち家出人や行方不明者を本腰入れて調査していたら金も時間も人手も足りないのだろう。それは重々承知だが、当事者になると納得出来ない。
ぶつけようもない苛立ちに愛用のクッションを探すが、手元に無い。見回すと部屋の端に机の上に並べていた雑誌等と一緒にくちゃりとひしゃげていた。大きく舌打ちして自分の膝を殴る。

『……ごめんなさい、あなたを巻き込むべきではないのよね。本当にごめんなさい』
あたしの舌打ちをどう思ったのか、おばさんがますます震えた声を出す。微かに鼻の啜る音も聞こえる。あたしは慌てて反論した。
「そんなことない！　むしろ教えてくれなきゃ恨みます。あたしだって、佳奈が大切なんです」
『由香里ちゃん……！』
ついにおばさんが本気で泣き出したようだ。嗚咽まで聞こえ、うっかりもらい泣きしそうになるのを堪える。
「おばさん、うちらがしっかりしないでどうするんですか。きっと見つかります。もし夜遊びなんかしてたらあたしが佳奈の頬っぺた張ってやりますよ」
あたしはまた自分の行動を棚に上げる。でももし佳奈が見つかるのなら、二度と夜出歩かないと誓うだろう。
「だから落ち着いて……そう、深呼吸して下さい。悪い方向に考えないで。――健次ケンジには言いましたか？」
おばさんの大きな息遣いを確認してから、気になっていたことを聞く。佳奈には弟がいて、まだ小学生三年生のワンパクかつ生意気な坊やだ。
『晩御飯が一緒だったから……。でもきっと遊びに夢中になってるのよってごまかしたわ。健もすんなり納得してくれて、今は寝てる』
「そう……」
あたしは健次の顔を浮かべる。佳奈がいなくなったと気付けばどういう風に歪むのかと思うと嫌な気持ちになる。あいつもなんだかんだ言って歳相応にシスコンだから、丸一日泣き止まないだろうし、きっと傷になる。
こんな時に彼らに父親がついていたらと顔も知らない相手を恨む。
「おばさん。とにかく、今は休もう。色々回って疲れたでしょ。また明日の為に体力蓄えなきゃ」
『ええ……分かっているのだけれど、でも』

「じゃあもう泣くのは終わり。佳奈は絶対見つかる。あたしが見つけるから」
『ありがとう……』
再度おばさんを勇気づけて電話を終える。電源ボタンを押した瞬間、堪えていた涙が頬を伝った。こんなに何度も泣いたのは久しぶりで、息が詰まって苦しい。
「なんで帰ってこないのぉ？」
ここにはいないあの子に呼び掛ける。空気に溶けるだけの声がただ哀しく、虚しい。もう二度と会えなかったらと途方もない恐怖に身を包まれた。
たった一晩くらい、なんだと言うんだ。あたしなんか無断外泊連日やって父に拳骨落とされた時だってあった。だから、だからきっとあの子だってすぐに帰ってくる。「……じゃなきゃ、許さない」
静かに言った言葉は、自分でもぞっとするくらい暗かった。

四話目

今何時だろう……。

ベッドで布団にくるまっているのに、目が冴えて眠れなかった。こんなにも身体は疲れているのに、叫びだしそうなほどの不安が胸の内に巣くっていてとてもじゃないが寝てられない。

――本当は、まだあたしは走り回ってなきゃいけないんじゃないか？

――佳奈はあたしの助けを今も求めてるんじゃないか？

止め処なく溢れる罪悪感と恐怖。吐き気すらした。

――おばさんには休もうって言ったけど、本当にそれで良かった？　あたしはこんな風に横たわってるだけで何もしないの？　もし、あの子が痛い目や苦しい目に会っていたら。

「嫌――！」

枕に顔を押し付け悲鳴を殺す。どくどくと耳に心音が宿る。これ以上考えていられない。

あたしは手を伸ばし、枕元の携帯を握った。充電もせずに放置したそれは、電池がもう残り少ない。考えを少しでもそらせたくて開き、ディスプレイが暗闇に強烈に光るのを目を細めて見る。頭が空っぽのまま、いつもの習慣で指を動かした。

「あ……」

着信履歴。母親がズラリと5件。その画面に佳奈のおばさんを重ねる。

「ごめんなさい……」

お母さんに。おばさんに。

やる瀬ない気持ちでいっぱいになり、ぐっと目を閉じる。もうこれ以上泣かないように目に力を込め、涙を納める。

重い溜息をつき、もう一度画面に目をやると、母の着信履歴が続

いた下にひとつ違う番号があった。
「佳奈」
表示された名前、あたしは何も考えずに通話ボタンを押した。
呼び出しが鳴る前の断続的な機械音がいつもより長くて冷静になり、出るわけ無いかと咄嗟の自分の行動を自嘲する。しかし、僅かな期待を捨てきれず携帯を握りしめて息を殺す。
プルルル、と耳元で聞き慣れた篭ったような音。次いで遅れてどこかで耳慣れない音楽が小さく流れた。
一瞬意味が分からず周囲を見回す。すぐに、ひしゃげたままのクッションの隙間からペカペカと心許なく光る緑色を見付けた。恐ろしい考えが頭をよぎり心臓が震る。息も絶え絶えに布団を抜け出し光のもとに行く。微かだった音楽が大きくなり、想定が現実になっていく様に汗が一気に噴き出た。
まさか、いや、そんな、と回らない頭で必死に言い訳し、力の入らない腕を伸ばした先にあった物。
思った通りだった。
「うそ……」
佳奈の携帯電話。ペールピンクの薄型で、あたしと同じ会社のものだ。
自分のを脇に置き、音楽の止んだ彼女のお気に入りの携帯を開く。機種こそ違えど慣れたボタン配置に、似たような機能。不在を訴える画面もワンボタンで簡単に一切間違わず。
ズラリと並んだのは同じ羅列の番号。おばさんの家なのだろう、簡素に「うち」
と番号の上に表示されている。そして最後の不在着信に由香ちゃん、という文字が浮かんでいた。
――今度こそ本気で吐きそうだ。そりゃあ繋がらないわけだよ。
気付けなかった自分を罵倒したい気持ちでいっぱいになる。
今日は佳奈と遊んだ後、寄り道してから帰り、居間に用意されていたご飯を片付け、風呂に直行して上がればあの電話だ。一度でも

この部屋に来れば気付いたかもしれない。
後悔しても始まらないのは分かっているが、止まらない。休日はなかなか起きられない遅刻魔のあたしに合わせ、佳奈はまずあたしの家に寄ってくれる。のんびりと準備するあたしは佳奈を二階にある自室に通すのが習慣だった。
「クソ……ッ」
今日だけでも早く起きていたら。そうじゃなくとも、もっと早い段階で彼女の携帯を見付けられていたら、何か違っていたかもしれない。
悔しくて壁を殴る。鈍い音と強い痛みをどこか他人事のように感じる。だらりと伸ばされた腕に少し血がついていて、漫画みたいと可笑しくもないのに軽く笑った。
そんな時だった。
さっき聞いたばかりの軽快な音楽が流れ、身体が大袈裟に跳ねる。慌てて痛みの無い方の手の中にある携帯を見れば、サブディスプレイに「着信アリ」という文字が光っていた。
もう深夜二時半、おばさん以外ありえない。あたしは急いで開き、番号も確認せず携帯を繋げた。
「……」
途端に何と言っていいか分からず黙ってしまう。謝るべきなんだろうが声が出ない。おばさんも同様で一言も喋らなかった。きっとあたしを佳奈だと勘違いしているんだろう。突然娘が電話に出てきてびっくりしているんだ。どうにか誤解を解かなきゃと唾を飲み、喉を動かす。
「……あ、の」
向こうで息を呑む音がする。あたしは怒られるのを覚悟して一息に言った。
「ごめんなさいおばさん、あたし、由香里です……！」
ぐっと唇を噛む。過去のどんな時よりも相手の反応を待つのが怖かった。しかし。

『っ――由香ちゃん！？』

聞こえてきたのは全く予想もしてない声だった。

五話目

生徒のみんなで騒いでいたのに、先生に代表でうるさいと小突かれたこともある、人より高めの溌剌とした女の子らしい声。
「佳奈……？」
呆然としながら、小さく呟く。数瞬、呼吸を忘れていたが、事態を把握した時には叫んでいた。
「ど――っっこに行ってたの！　ていうか、今何処！？」
『由香ちゃん由香ちゃん、あああもう本気で嬉しいよぉ、あたしずっと一人で、』
「なにそれ、迷子！？　まさか閉じ込められてたとか！？　誘拐！？」
『違くて、そうじゃなくて、あーもうとにかく話せて良かった……！』
「あたしもだって！　てか何で家に戻んないの！　どんだけ捜したと思って……！」
言いかけて息が詰まる。疲れや不安が吹き飛び、生まれて初めて安堵で涙が溢れた。
「ばか、あほ、間抜け、誰かに拉致られたかと思ったんだから……」
叱る言葉すら震えてまともに声にならなかった。きっと佳奈もあたしが何を言ってるかよく分からなかっただろう。でも止まらなかった。
「何考えてんの！　おばさんだってずっとあんたのこと……っ……あほ！」
『由香ちゃん……泣いてるの？』
佳奈がほうけたような声を出す。
「泣いちゃ悪いの！？」
『ううん、でも由香ちゃんが泣くなんて……』

その言葉に頬が熱くなっていくのを感じた。確かにあたしは滅多に泣かない。
怒られたり苛立ったり感動したりで一々泣くのは、子供っぽくてダサいと思っていたからだ。
「佳奈みたいな泣き虫に言われたくない」
恥ずかしくて根性で涙を止める。軽く深呼吸をし、早口になったがなんとかまともに言い返せた。
『へへ……あたしもさっきまで泣きそうだったけど、由香ちゃんのもろ泣きにびっくりして涙引っ込んだよ』
「うっさいなぁ……。もう泣いたとかどうでもいいから。その話はおしまい。てかそれよりもそっちの話でしょー、もう家に帰れたの？」
羞恥をごまかし捲し立てる。背もたれにしているベッドの脇のティッシュで鼻水を拭いながら返答を待つが、佳奈は中々言い出さない。そんな彼女を訝り呼び掛ける。
「佳奈、どした？」
『……あの、ね。あたし、これから変なことといっぱい言うけど、黙って聞いててほしい。……いい？』
変なことって何よ。
根掘り葉掘り聞き質したくなるような言い方に、ぐっと堪えどうにか平静を保ち、続きを促した。
「うん、いいよ。何？」
あたしの了解に、佳奈はありがとう、と嬉しそうに言った。だが、中々話始めない。もどかしい気持ちになりながらも、あたしは待った。頭をもたげる好奇心を押さえ付け、佳奈の邪魔をしないように一言も発さなかった。
ふぅ、と向こうで溜息のような息遣いが聞こえる。
『あたし……その……もう地球に居ないの。でも地球みたいな、パラレルワールド？　っていうのかな……？　えと、よく分からないけどそこに居るの』

ぱら……へ？

言われた言葉がいまいち理解できなくて首を傾げる。いきなりのSFちっくな話に脳内処理が追い付かなくて黙っていたら、ぼそぼそだった佳奈が次は一方的に話し出した。

『えぇーと、ほら、あたしがいなくなった日！　あの日にあたし何か変な壁越えちゃったみたいで、気が付くとおかしな場所に居て、んでわけ分かんなくてぼうっとしてたら黒いコートみたいなの着てる人が助けてくれて、でも研究所の人で実験されそうになって、嫌だって泣いたり暴れたりしたらゲインって人が助けてくれて、それからリューセンのでかい家に連れていかれて』

「ちょっ、待って！　ストーップ！　落ち着け！！」

沢山言われたのにおかしなことに何も理解出来なかった。これ以上意味不明な説明されても頭がこんがらがるだけなので慌てて止める。佳奈はぴたりと話すのをやめ、一言、やっぱり信じられない？と心細げに言う。あたしは苛立ちそうになりながらも彼女に言い聞かせる。

「信じるとか信じないとか、それ以前に意味分かんないから。ちゃんと順番に、ゆっくり、丁寧に喋って？」

佳奈は焦ると主語術語が抜けたりすることはよくあったが、さっきの話し方は酷い。酷すぎる。何だかまるで、彼女が突然外国にでも行ってしまったみたいなテンパりかただった。

「ええとまず、佳奈がいなくなった時。えーと、何？　壁？　まぁいいや、それを話して」

落ち着いてね、と付け加えておいた。

五話目（後書き）

半分コメディーですね^^；　もうちょいアホっぽいの続きます。

六話目

信じるか、信じないかは、アナタ次第よ。

そんなどこかの映画のような台詞が浮かんだ。まだ話は序盤なのに。

空っぽの相槌をうちつつ、病的な話を少しでも理解しようとして苦心する。あたしには柔軟さが足りないのかもしれないが、脳みそがいかれそうだ。

あたしは佳奈の親友、と自分に言い聞かせる。例えその話が、かなり痛い内容だったとしてもあたしは佳奈の味方よ、と。

出そうになった溜息を、彼女にばれないように慌てて呑み込んだ。

佳奈はいなくなった夜、家に帰る途中よく通る道に見たことも無い空き地を発見し、好奇心に負け入って行ったそうだ。

草が生い茂り、外から見ていたよりも意外と広いその場所には、中央に大きな白い噴水があったらしい。しかし水は枯れており、しかも古めかしい。だが、海外にありそうなスタンダードな形の噴水に引っ付いていた彫刻の像は、とても精巧で美しく思わず傍に寄って鑑賞したくなるほどだった。もちろん躊躇する理由もなく、佳奈は近寄ってしげしげと眺めた。すると彫刻のすぐ横にノブのような取っ手があるのに気付く。何だろうと回すと噴水の柱がドアのように開いた。そこには人一人が入れるような空間があったらしい。

そして言わずもがなだが彼女は入った。そして落ちたそうだ。

『入る前や片足突っ込んだ時は床があったんだよ。でも両足入れた瞬間にいきなり床が消えて、そのまま落ちちゃった』

んな馬鹿な、そもそもそんなとこ入るな。
そう言いたいのをどれだけ我慢したことか。序盤からツッコミ所満載な話に苦しむあたしには気付かず、彼女は話を続けた。
『落ち続けて、すっごい悲鳴あげたのに誰も助けてくれなくてさ。死んじゃうのはいやだったけど死ぬんだって思った。勝手に涙まで出て来てさ、いやだと仕方ないが頭ん中ぐるぐる回って神経切れるかと思った』
しかし彼女は死ななかった。気が付くと、見たこともないような西洋風の広い庭園を前にしていて固まったらしい。否、見たこともない、は間違っている。
一つだけはっきりと覚えていたものがあった。――あの噴水だ。
『色も形も汚い感じもあのカッコイイ彫像も全く同じやつ。だから急いであのノブ探したんだけど、それだけは全然見付からなくてさぁ……』
結局諦めた佳奈は、枯れた噴水に寄り掛かり寝てしまったそうだ。しかし、そんな呑気な行為を黙って見過ごしてくれるほどその世界は甘くなかったらしい。佳奈は、目が覚めると黒いコートのような衣服に身を包んだ不健康そうな男に身柄を拘束されていた。
しまった、と思った時にはもう遅い。暴れようが泣き叫ぼうが、がんじがらめに縛られた縄は切れないし、頭をぐるりと一周した目隠しも解いてもらえない。佳奈は喰われる、と思ったそうだ。
『でも、そうじゃなかったよ。逆に超美味しいご飯ご馳走してくれてさぁ。茶碗蒸し並に美味しかった。まじで』
茶碗蒸し並とは佳奈にとってかなり高い評価だ。佳奈は茶碗蒸しがとても好きだった。
「毒でも入ってたらどうすんの……」
あたしは痛くなった頭に手を添える。彼女は考えてもみなかったようで、暫く黙った後、でも入ってなかったし結果オーライ？　とごまかした。
目隠しと縄を解かれ目にしたのは沢山の綺麗に磨かれた椅子やテ

ーブルなどの調度品、高そうな幾つもの絵画や花瓶、清潔で、入ったこともないようなほど広い高級レストランみたいな部屋。そんな場所に連れられた佳奈は、豪華な料理を振る舞われ、それなりに優しくされ、とても舞い上がったそうだ。

『でも最低なのはその後。あいつめちゃくちゃサイコヤローでさ！　もー思い出すだけでもマジきもいんだけどっ。あのさ！　ご飯終わったらいっぱい人がきて、またいきなり縛られてさ、服脱がされた！』

「はぁ！？　なにそれどういうこと？　そいつらにヤられたの！？」

『ヤ……っ！　い、いや、そういうんじゃなくて……』

「じゃあ何！」

突然の展開に、半信半疑で聞いていたくせに一気に怒りが沸騰した。途端に小さくなった佳奈の声に噛み付く。無理矢理するような変態は許せなかった。

『それがさ、最悪なんだよぉ……。なんか変な箱みたいなの持って来てさ、なんだろー、とか思ってると、あたしをそれに乗せたの。それ、体重計だったんだよ！　あいつ沢山の人の前であたしの体重量りやがった！』

「なにそれ最低！」

『しかもメモって回しやがった！』

「死ね！」

あまりのことに腹立ちが治まらない。会ったこともないそいつが、口汚く罵られて殴られても仕方の無い内容だと思った。

『なんかご飯前と後との体重の差が云々～とか言って、ニヤニヤしながら周りに話すんだよ。あいつほんと最っ低だよ。しかも動けないあたしの髪の毛や爪や皮膚や血までとられて、最後には骨も見たいとか言ってきてっ……』

佳奈の声が詰まった。啜り泣くような声音が聞こえる。

『ほんと、怖かった。芋虫みたいに逃げ回って、でも捕まって。痛い思いするくらいならあの時死んじゃった方がマシだったって思っ

たもん』
　あたしは恐怖と怒りで身体がぶるぶると震えた。痛みを意に反して与えられることはどれだけ苦痛だろう。それが赤の他人でも見てられないのに、親友である大切な存在に起こったなんて信じたくなかった。
　きっと佳奈も震えているだろう。でも手を伸ばしても触れることは出来ない。泣きたくなるほど歯痒かった。
『でも、大丈夫だよ。ちょっとだけ痛かったけど、途中で助けてくれた人がいたから。ごっついおっさんだったんだけど、突然部屋入って来てサイコの頭殴ってさぁ、首もげちゃうかと思った』
　先程とは打って変わって明るく笑う彼女に少し安堵し、だがきっと無理しているのだろうと思うと痛々しい。
『しかもその人サイコの父親なんだって！　殴りながらやり過ぎだって叫んで、あたしには育て方を間違えてすまないって頭下げてくれたよ。なんか、めっちゃ苦労してそうで可哀相だった』
「……育て方間違えたのはそのおっさんなんだから仕方ないんじゃない？」
　あたしも切り替え、努めて明るい声を出す。彼女は、確かにそうだね、とまた笑った。
　その後、服を着直した佳奈はその建物を出たらしい。おっさんはしきりに謝り、建物（研究所らしい）から少し離れ、出店がいくつか並んだ所で棒付きの甘い飴玉のようなものを買ってくれたそうだ。
　それを一緒に食べながら、彼女はおっさんから色々な情報を聞き出した。佳奈の今居る世界のこと、さっきの研究所の役割、佳奈自身の存在がその世界にとってどういうものか。
『いっぱい話してくれたけど、正直この世界の歴史とか仕組みとか、サイコな息子さんが継ぐ予定の研究所の大事さとか、いまいち分かんなくて……。一番覚えてるのはあたしがたまに出現する異分子って呼ばれる存在ってことと、まだここの国では戸籍？　みたいのが認められてなくて、サイコみたいな人に狙われやすいってこと、あ

とは飴が凄く甘かったってことぐらい』
そっちの飴の三倍くらい甘かったよ、と言う佳奈の表情が浮かんでくるようだった。彼女は意外にも、甘過ぎる食べ物は苦手なのだ。はぁ、と佳奈が溜息をつく。
『帰りたいよ、由香ちゃん。もうここはやだ。優しい人もいっぱいいるけど、やっぱりお母さんや健次や由香ちゃんと一緒がいい』
「佳奈……」
あたしは恥ずかしいやら嬉しいやらで、そんな状況でもないのに頬を染めた。しかしやはり、どちらかというとお姉さん兼親友的な存在を自負しているあたしはそれを佳奈には伝えない。むしろ呆れたように言った。
「何言ってんの。帰れるよ、行けたんだから。もう二十一世紀だよ？　時空なんかちょろいっしょ」
もちろんそんなこと本当には思っていない。でもそう信じたかった。
「たった一晩変な場所に行っちゃったからって諦め早すぎ。どうにかしたら何とかなるよ！」
あたしの無責任な言葉は、佳奈を元気に至らすには程遠い。それでもともっと言い聞かせようと口を開く。しかし佳奈は変な声を上げ、それを制止した。
『へぇっ！？　ちょ、ちょっと待って』
「……何？」
『一晩？　なんで？　もう二週間は経ったよ』
「はぁ？」
突然の意味不明な発言に、今度はあたしが変な声を上げる番だった。
「二週間？　えぇ、なに、どういうこと？」
わけが分からず呟く。佳奈も向こうで困惑しているようで、分かんない、と小さな声が洩れた。
『あたししっかり日が沈んでからおっさんから貰ったノートに日記

書いて寝てるもん。もう今は夜で、明日になれば十六日目』
「うそ……」
時間のずれまで生じている世界。海外の時差とはわけが違う。あたしはますます佳奈と引き離された気がして絶望的な気分になった。
いけない、と自分を奮い立たせる。現に今話せている。向こうとこっちは何かが繋がっているはずだ。
「佳奈」
『……なに？』
呼び掛ければ返ってくる声に安心する。それが不安げな頼りない声でも。
「絶対連れ戻すから、待ってて」
『……うん！』
元気な返事に、あたしは微笑った。

七話目

佳奈はその先のことも話してくれた。
今はそのおっさんのでかいお屋敷に居ること。これからもしかしたら、そこの国の権力者と会わなければならないかもしれないこと。おっさんの名前はゲインで意味は、美しい人、らしく、その筋骨隆々な姿とは全く結び付かず暫くはおっさんをからかって遊んだこと。おっさんの家にいるお手伝いさんは優しい人ばかりで、突然泣き出す彼女をいつも慰めてくれること。料理がおいしくて嬉しいこと。出される服があまり趣味じゃないけど、言い出せないこと。サイコヤローがまた身体を調べに来たこと。

あたしはいちいち心配したり戸惑ったりで、落ち着いて聞けなかった。
そして数ある話の中でも一番驚いたのは、佳奈が自分の携帯電話からかけていることだった。あたしが佳奈の携帯で通話しているのに、何故彼女はしっかりと自分の携帯を持っているのだろう。それはいくら考えてもさすがに結論が出なかった。
『あたしがこっちに来た時は、誰にかけても鳴りっぱなしで留守番センターにすらいかなかったよ。最初、一時間以上色んな番号かけっぱなしにしたり、メールやネット試してみたりしたけど駄目で、諦めてあたしが使わせてもらってる部屋の机の中に放置してたんだよね。で、今日の夜、すっごいキレーな月が出てて、見てたら悲しくなってきてさ、久しぶりに携帯出してみたんだ。そしたら、電池全っ然減ってなくって！　もちろん充電器なんかないんだよ？　もう凄くびっくりして、でももしかしたらなんかあるかもと思ってまた登録番号に一通りかけてみたの』
しかし誰も出ず、最後に冗談半分で自分の番号にかけてみたらし

い。
「それで、あたしが出たんだ」
『うん、最初繋がったのに驚いて、んで誰かが出たと思った時は嬉しかったけど、すんごく怖かった。一体誰だよーって思って、由香ちゃんでしょ。めちゃくちゃ安心して、でも、由香ちゃんがマジ泣きしたのに超びっくりした』
「……うっさい」
『あはは、照れてんの？　かっわいー由香ちゃん』
「切るよ」
『っごめんごめん切らないで！』
もちろん切る気など無い。しかし、人が恥ずかしい思いをしているのにからかうのはどうだろう。昔から妙にあたしには子供っぽい我が儘や冗談を言ったりする佳奈は、可愛い反面憎たらしい。あほらしい応酬をしながら、ふと気付く。
「そういえば、そっちは今何時なの？　もう朝になった？」
『え、まだだよ。なんで？』
「なんでって、そっちの方が時間の進みが早いんでしょ？　じゃあもうだいぶ経ってんじゃないの？」
『ううん、まだ夜のまま。……どうしてだろ？』
「うーん……」
だが、もし時間の経過がむこうの方が早いのなら佳奈の言葉なりなんなりが高速じゃないとおかしい。
あたしは暫く唸りながら考えたが、簡単に匙を投げた。そもそもパラレルワールドとかいうもの自体がまゆつばなのだ。理解できなくて当然なのかもしれない。
取りあえず、それらは後でゆっくり考えればいい。
ちらりと部屋の壁に掛かる時計に目をやると、もうあと十五分で朝方の四時だった。
「……ねぇ、佳奈」
『なぁに？』

「この電話、切ったら二度と繋がらないなんて、無いよね？」
『えっ……分かんない、もしそうだったらどうしよう』
こちらの世界の常識が通じないのだ。そもそも今の状態が奇跡に近いのかもしれない。携帯を耳から離して見てみると、満タンだった電池が一つ減っていた。こちらの携帯は向こうとは違いは消耗するらしい。
「そうだ、繋ぎっぱってのは？」
通話を切らずに充電すればいい。心配なのは、充電器をさしっぱなしだと母が部屋に入った時に抜かれる可能性があることだ。事情を説明すればいいのかもしれないが、こんな荒唐無稽な話、佳奈を電話越しに交えても納得させる自信がなかった。
しかし、あたしには奥の手がある。佳奈のおばさんちに持って行けばいいのだ。そしたら、一応だが娘の安否も確認できる。一石二鳥だ。
『それしかないかぁ。あたしの携帯、やっぱり電池減ってないみたいだし、充電は多分大丈夫』
「ん、じゃあそれでいこう」
こうして打ち合わせた後、取りあえずあたしと佳奈は休むことにした。あたしは学校があるし（起きれなくてサボるかもしれないが）、佳奈は佳奈で、朝っぱらからお手伝いさんが優しく起こし朝食を出してくれるので、無下に出来ないそうだ。
ことり、と散らかった机に佳奈の携帯を開いたまま置く。同じ会社だからあたしの充電器が通用し、ホッとする。一方で、赤いランプを見つめながら、これからどうなるのだろうと底の無い不安を感じた。

夢をみた。きっと色んなことを考え過ぎてて眠りが浅かったからだと思う。

あたしは教室にいた。制服はセーラー服ではなく中学の時の濃紺のブレザーを着ていた。しかし別に戸惑うこともなく、ただ普通に受け入れ、ぽつんと一人教室の自分の席に座っていた。窓際から三つ目、後ろからも三つ目のその席が、あたしはあまり好きじゃなかった。

一人だけだと広すぎる教室で、何でみんないないんだろう、と周囲を見回し、目に痛いほどの夕焼けに今更気付いて、あぁ、放課後だからか、と納得する。納得したと同時に、廊下からの吹奏楽部のトランペットの音や、外からの野球部のランニングの掛け声が微かに聞こえてきた。

あたしは頬杖をつきながら、所属しているはずのバドミントン部に行くこともせず只々じっと夕日を見ていた。

何分経っただろう。夕日は全く微動だにしない。結構長い間座ったままなのに、それを苦痛に感じることもなかった。

「由香ちゃん」

聞こえた声に視線を動かすと、最前列の窓際の机に佳奈が寄り掛かっていた。夕日に染まって真っ赤になった姿を見て、あぁ、あたしはこの子を待っていたんだ、と思った。

八話目

母の声に飛び起きて、睡眠が足りない怠い身体に呻く。でも結局学校には行くことにした。今の時間割りは月曜なのに午前中に体育の授業が二限も連続であるから、あまり休めない。単位が足りなくなったら困る。

朝からバタバタと走り回り、準備を済ます。起きた後も中々ベッドから出られなかったので、いつも以上に忙しい。佳奈の携帯が開いたままなのを横目で確認し、部屋を出る。母には適当な理由を作って部屋に入らないようにと再三再四言っておいた。朝ご飯と歯磨き粉が一緒くたになったような味が口の中に残り、気分が悪くなりながらも学校に向かった。

教室はざわめいていて、ドアを開けば何人かが挨拶してくる。なんだかこちらの方が現実みがなく、少し戸惑う。適度に忙しく適度に退屈で、日常が溶けてしまいそうな感覚を一晩で忘れてしまったように感じた。

「由香里ぃ～」

いつも連んでいる友人の一人、奈穂子ナホコ通称なっちんが、端の席で壁にもたれ掛かったまま椅子に行儀悪く座ってあたしを手招きする。どこかぼんやりとしたまま傍に寄ると、楽しそうに笑いながら聞かれた。

「ねー、昨日の電話、なにあれ？」

「……電話？」

一瞬どきりと心臓が跳ねた。昨日の佳奈との会話が頭に浮かぶ。しかし当然、彼女の言いたいこととあたしが思うことは違った。

「ほら、南ちゃんと今一緒～？　って」

「あぁ……。昨日あの子帰らなかったんだって。なっちんは知らな

いかなぁと思ってさ」
「なーんだ、そんなことかぁ。どうせ遊んでんでしょ」
「……はは、でもやっぱ心配じゃん？」
「えー、別に。てか由香里は過保護すぎだと思うし」
「……まぁ、なんか気付いたら教えてよ」
「ハイハイ」
へらへらと笑う友人に嫌気が差してきた時、丁度よくチャイムが鳴った。無言でその場を立ち去り、自分の席に戻る。微かに自分に纏わり付いた彼女の香水の匂いが、初めて癇に障った。

担任が教壇に立ち出席をとる。とは言っても、空いている席を確認して終わりなのだが。今日は佳奈だけが空席で、担任はそこに目をやり、すぐ後に意味ありげにあたしを見た。
あたしは素早く目を逸らしたからどれくらい見られていたのかは分からないが、ただひたすら嫌な気持ちになった。

朝の連絡などが終わり、次はチャイムの後に音楽が流れ始める。クラシックのゆったりした音、それは朝っぱらから掃除しろという強制の音色なのだ。何故朝から、というのは入学したてに校長が体育館でたっぷりと時間をかけて聞かせてくれた。まぁ要約すれば、昨日の汚れを朝から落とせば一日爽やか！　ということらしい。朝から埃まみれになるあたしたちのことは全く頭に掠らなかったようだ。
今週の掃除場所はどこかと教室の隅の張り紙をみんなに混ざって見ていると、ぽんと肩を叩かれる。振り返ると、担任が笑顔であたしを見ていた。思わず眉が寄るが、担任は気にならないみたいで笑顔を保ったままだ。
「河野カワノさん、あとで職員室に来てちょうだい」
「えー……なんで？」
学校の先生に対する敬語は既に使う時の方が少ない。先生によっ

ては小突かれるが、担任は使わなくても文句は言わなかった。
「用があるからよ。長くなるかもしれないから昼休憩にね」
「ごはん食べれないじゃん」
昨日のこともあってつい刺々しい言い方をする。当番表を見ていた何人かが振り返る。
「お昼の後でもいいから。でもなるべく急いでね」
「……はー、めんどくさいなぁ」
はいと言いたくなくて、遠回しにＯＫした。どうせ拒否することはできない。

九話目

掃除、現国、体育、体育。全く身が入らない時間を過ごし、昼になる。体育の後でそれでも移動と着替えに時間がかかるのに、弁当など食べる暇がない。誘ってくれた友人たちに謝り、職員室に向かった。

ドアを開けると食べ物の匂いが広がり、空きっ腹に余計苛々した。担任の机に近付くと、彼女はもう食べ終わったのかコーヒーを啜っている。

「せんせー、きたよ」

後ろ姿に呼び掛けると、あら、と一言漏らしコーヒーを置く。くるりと椅子を回転させあたしの方に向き直った。

「お昼終わった？」

「終わってない。お腹空いてるから早く済ませてよ」

だから食べて来なさいって言ったのにとぶつくさ文句を付けたあと、担任は本題に入った。

「南さんのことなんだけど」

――やっぱりな。

早々の予想的中に仏頂面になった。あなたに話すことなんてありませんよー、と心の中で嘲りつつも表では無言を通す。担任はどこかあたしを窺っているような目付きをしている。

「彼女が今日学校に来てない理由、知らない？」

「知らなーい。てか、佳奈のおばさんから連絡きてないの？」

「きてないのよ。だから困ってるの。ほら、あなたが一番南さんと仲良いじゃない？　だから知らないかなぁと思って」

堂々と嘘をついた彼女に不信感がぐっと高まる。担任の薄紅を塗った唇がコーヒーくさい息を吐き出すのを酷く胸糞悪く感じた。

「知らないよ、あたし」

「そう……、じゃあ、昨日は会わなかった？　休みだったし、遊んだんじゃない？」
「……遊んだけど」
「あら本当？　それって何時くらい？」
勢いよく食い付いてきた担任に、昼、とだけ返す。彼女は納得しなかった。
「昼？　本当に昼？　昼から遊び始めたんじゃなくて？　夜は？　南さんがあなたの家に泊まったりとか」
あたしは段々と眉間にシワが寄っていくのを押さえられなかった。やはり予想通り、担任はあたしを疑っていた。数週間前佳奈と二人で居た時に、あなたたちはあまり仲良くなりそうにないと思ってたわ、と笑い混じりに言われたのを思い出す。あぁ、この人はあたしたちが仲が良いことが気に入らないんだ、と何となく思った。
あたしにとって佳奈が人見知りしてるだけに見えても、担任には大人しげで他の子よりも従順に見えるようで、そんな彼女を気に入っている節があり、同時にあたしといると何かしら悪い影響になると考えているようなのだ。
「……佳奈とは夕方別れたし、それから一度も会ってない」
段々と声のトーンが落ちていくのに気付いたのか、担任が気まずげに目を逸らす。そうなの、と歯切れ悪く呟き、唐突に話題を変えた。
「河野さん、化粧が濃いんじゃない？　それにスカートも短すぎるわ。直しなさい」
突然きつい言い方になった担任に既の所でキレそうになった。もうこの女の側に一秒でも居たくなくて無言で背を向ける。彼女も引き止める素振りは見せなかった。
職員室のドアを少々乱暴に閉めて早足で廊下を進みながら、あんなやつ先生やめちまえ、と胸の内で毒づく。
確かに化粧はしていたが、朝は急いでいたからほとんどつけてないくらい薄く、移動教室が多くて直す暇も無かった。それに、あれ

は担任の悪い癖が明らかに出ていた。彼女は生徒を叱れば威厳を保てると思っているようで、都合が悪くなるとよく叱りだすのだ。

いつもの倍速く教室に着いたが未だ苛つきが治まらず、一応まだ休憩の時間はあるが何も食べる気にならない。席につき鞄から自分の携帯を引っ張り出す。ぱかっと開いたはいいが、電池が無くなりかけていて碌に使えそうになかった。取り敢えずメールが何通か来ていたので確認し、それらのほとんどが昨晩のものだと気付く。

そういえば誰かがメール返せよーとどついてきたような気がする。見返してみたが今のところ急を要するものは無さそうなので（というか、むしろ中身の無いものばかりだ）、携帯を閉じる。家まで持つだろうかと考えていると、机の前に誰かが立った。あたしは顔を上げる。

「何、なっちん」

「さっき呼び出されてたっしょー。なんか言われた？」

たまたま空席だったあたしの前の席にどかりと座る奈穂子。朝のこともあり、更に先程の苛立ちを引きずるあたしはあまり彼女と楽しく会話をしたくなかった。わざわざ友人たちの輪に入らずに机に向かった意味がない。正直欝陶しい。

「……化粧とかスカートとか怒られただけ」

「マジ？　超うざいねー、可哀相に由香っちぃ」

けらけらと笑いながら頭を撫でられ、彼女の華奢な手首に幾つかついている髪結い用のゴムが額に触れて、汚い、と思った。違反にぎりぎりならない程度に染められた腰まで伸びる茶色い髪も、マスカラが重ねられたつけ睫毛も、うっすら青っぽく見えるカラーコンタクトを入れた二重の目も、弧を描く薄い唇も、透明のピアスが一つずつある耳も、今は彼女のどこもかしこも気に入らない。

「……あたし、気分悪いから帰るわ」

「は？」

「じゃあねなっちん」

机の横に掛けてある鞄をひっ掴み席を立つ。
「ゆ、由香里？」
驚く彼女をほうって、教室の後ろにあるロッカーに突っ込まれた体操着の入った鞄も乱暴に取り出す。足早に教室を出て、ドアを閉めた。
なにあれ、と教室からこそこそ聞こえた気がしたが、どうでもいい。うちのクラスはイジメは一応無いが、今のは起こっても不思議じゃない。だが、本当にどうでもよかったのだ。
「帰ろう」
ぽつりと呟く。帰って佳奈と話そう。そう、これからのことを話し合わなきゃ。
教室のざわめきを振り切るように、歩き出した。

十話目

「え……どうして……？」
家に着き母がパートに出ていたことにホッとし、手洗いとうがいを手早く済ませ自室に上がった。すぐに、机の上で相変わらず開いたままの携帯電話に手を伸ばしかけ、愕然とする。
通話が、切れている。
あたしは瞬時に携帯を掴み、ボタンを操作した。オーナー情報、プッシュ、発信――。
「なんで！？」
機械のアナウンスに向かって叫ぶ。当然返事は返ってこない。
「酷いよ、どうして」
――どうしてあたしからあの子を奪うの？
何度も繋がらない発信を繰り返す。胸の内でゆっくり膨れ上がる絶望と、怒り。数度目のアナウンスを聞いた瞬間、手の中の携帯を壁に投げつけた。
思ったより軽い音を立ててぶつかった携帯から電池パックが飛び出すのが見えた。

聞き慣れた足音。一定の場所で止まり、チリチリとキーホルダーの音を鳴らす。暫くするとまた足は動き出しあたしのすぐ傍で止まる。くるりと勝手に回る錠、目の前の板チョコレートみたいな洋風なドアは簡単に開いた。
「あれ、由香里？　そんなとこで何突っ立って」
「あたしの部屋入った？」
母の言葉を遮り、問う。あたしに似た形の、大きな二重の瞳がパチリと瞬く。
「入ってないけど」

「……本当に？」
母は右腕から提げていたエコバックを、傍らの靴箱の上の空いたスペースに横倒しで置く。今日の夕食用なのか、ホールトマトの缶が一つごろりと転がった。
「だってあんたが朝あんだけ入るなっつったじゃない。掃除途中なんでしょ？」
「絶対入ってない？」
「うん。なんでよ？」
「……物が動いてたから」
「神経質ねー！　誰に似たのかしら」
「もういい」
母があたしをからかいだしたが、付き合ってられない。くるりと背を向けて二階に上がろうとする。しかし、途中で肩を掴まれた。
「何！　あたし今忙しいんだけど！」
「あんた、なんかあったの？」
「……別に。痛い放してよ」
ふぅと母が溜め息をつき、ぱっと肩の上の手が消える。あたしはやり場のない苛立ちに大きく舌打ちし、さっさと階段に向かった。後ろで、また溜め息が聞こえた気がした。

投げてしまった携帯は電池パックとその蓋がとれていて、且つ右上の角の塗装が剥げて少し銀色が覗いていた。あたしは虚しい思いをしながらそれらを組み立て直す。充電器は携帯にささったままだったが、根本のコンセントは外れていた。
「ばかみたい」
ぱちりと音を立てて蓋を閉める。剥げた塗装を数度指で撫で、でこぼこした感触に罪悪感を感じる。
――あたしのじゃないのに傷つけちゃった。
……しかし、誰のだと言うのだろう。本来の持ち主はしっかりと同じものを持っている。じゃあこの携帯は一体誰のもの？

「――いない……」
持ち主なんていない。
そうだ、だって昨日あの子は消えちゃった。
佳奈はもうここにはいないんだ。
ああ、駄目だ、と思う。とてつもない絶望が身体の中にじわりと広がり、何もできなくなる無力感にいっそ死にたくなる。そこであたしは、ふと気付く。
あの子は本当は変な世界に行ってしまったんじゃなく、何か事件に巻き込まれて死んじゃったんじゃないの？、と。
だって有り得ない。同じ物が同時に存在して、なのに佳奈は独りきりでここには居ない。
正直どこかのよく分からない世界よりも、幽霊や死後の世界の方がまだ信じられる。もう佳奈は死んでる、なのに本人は気付いてなくて、自分の中で奇妙な世界を作り上げ、そこで生きてる気になってる。
「あはは、簡単じゃん」
じゃあ――じゃあ、どうやったらまたあの子に会える？
そう、簡単なんだ。
「死ねばいい」
はは、と軽く笑い立ち上がる。近場にあるビルやマンションをいくつも思い浮かべる。一歩踏み出せばまた会える。会いたい。
すぐ行くから、と呟いた言葉。しかしそれに、うるさいくらいの音が重なった。振り向くと、鞄から出して放置していたあたしの携帯が好きな歌をバイブレーションと共に鳴らしている。
あたしは考える暇もなく携帯に向かった。ばちんと勢いよく画面を開き、よく見もせずに急いで通話ボタンを押した。

十一話目

鳴り続ける携帯をぶつけるように耳に当てる。最近流行りのあまり可愛いげのないアヒルのストラップが跳ねて勢いよく首を打つが、それさえ気にならず、半ば叫ぶように言った。

「もしもし！？」

『……もしもし、由香里ちゃん？』

「あっ……あの……こんにちは、おばさん」

大きく肩を落とす。電話で良かった。あからさまな落胆を顔にのせ、あたしはつくづく思った。そういえば、いつでも連絡できるようにとおばさんにあたしの携帯番号を教えたのだった。

『……由香里ちゃん、私、警察に行ってきたわ』

「警察……」

『やっぱり沢山のこと聞かれて……ううん、もうそれはいいの。あの子が見つかればそれでいいわ』

「おばさん……？」

思わず聞き返したのは、彼女が昨晩のように震えておらず、まるで別人のように声を励ましていたから。

『昨夜はみっともなく頼ってしまってごめんね。取り乱していたの。でも、もう大丈夫よ。わたしはあの子を見つけてみせるわ』

力強い心のある声に少しだけ怯んだ。まるで、今の自分に足りないものを見せつけられている気分だ。

あたしには分からないが、もしかすると彼女に何かあったのかもしれない。ただ、先程まで死のうなどと言って半分逃げていた自分が凄く恥ずかしくなった。

『あなたにはまだまだ迷惑をかけるかもしれない。……いえ、きっとかけるわ。またみっともない所を見せてしまうかもしれない。それでも……わたしの娘を一緒に捜して欲しいの』

――　一体彼女のどこが弱いんだろう。
あたしは佳奈と雰囲気の似ている彼女を、佳奈同様守ってあげたいと思っていた。幾つも歳の離れた彼女の弱り切った声に、これ以上傷付けたくないと確かに感じたのだ。
「……は、い。あたしも頑張ります」
どう答えればいいのか分からず、まごつきながらも在り来りの返答をする。すると、衣擦れの音と共に、宜しくお願いします、と聞こえる。きっと電話越しに深く頭を下げているだろう。あたしはそんな彼女に恐縮した。
「こちらこそ宜しくお願いします……」
何の工夫もない一言だが、彼女は、ありがとう、と丁寧に礼を言った。
自身の情けなさに吐き気を感じる。どうしてあたしはこんなに役立たずなんだろう、と終わりのない自責の念にかられ、息がしづらい。自分を罵る言葉ならいくらでも浮かんでくる。
――もし、異世界なんて口にしたら、どんな反応をするんだろう。
ふと思う。今ここで佳奈は異世界に消えたの、と言えばどうなるのか、と。
――おばさんもあたしみたいにただ泣くだけの役立たずになるかな？
あたしは自分の考えに少し楽しくなり、そして更に強い吐き気を覚えた。
分かっている。あたしはただ何もできない自身が嫌でしょうがなく、それを他人に押し付けて少しでも楽になりたいだけだ。そんなことをしたって罪悪感で潰れるだけなのに。
『ずっと――』
「……え？」
暗い思考に浸りきっていたあたしに、ぽつりとおばさんが漏らした声が届く。
『ずっと、由香里ちゃんと一緒にいたいってあの子は言ってたわ。

お母さんよりも？　って聞いたら、困った顔して答えなかったのよ。あの子……嘘が下手なんだから』
「……」
『由香里ちゃん、佳奈に会ってあげて』
「……はい」
――会いたい。
目をこすり、唇を噛む。
向き合おう。向き合わなければ。そう、ぐずぐずと自分を責めていたってなにも始まらない。
どんなに荒唐無稽で、どんなに突飛で、どれだけ馬鹿馬鹿しい思いをしても……そして、どんなに自分の無力さを思い知らされても、逃げるのはやめよう。

あたしは一階に降り、居間にあるパソコンの電源を点けた。母は機械音痴でパソコンには一切触らず、父は自分のノートパソコンを持っていて、居間のパソコンを使うのはあたしと兄貴だけだった。しかしそれも、兄貴が大学生になって勉強にサークルに遊びにと忙しくなってからはほぼあたしだけだ。
独占状態のパソコンだったが立ち上げるのが面倒で、二、三日に一度友人のブログやお気に入りのサイトをちらほらと見るくらいにしか使っていない。あまり構いすぎるとキッチンにいる母に怒られるかもしれない、と手早く大手検索エンジンをクリックした。
「超いっぱいあるし……」
パラレルワールド、と一言打っただけで、出てくる出てくる、一日で見終わるなんて到底無理な量だ。既に腰が引けていたが、先程のおばさんの言葉を思い出し、マウスを動かし始めた。
二時間ほどパソコンと向かい合い、晩ご飯を食べてからまた向かい合う。夜の十時頃になるとさすがに母と仕事から帰ってきた父か

らの小言が始まったので、名残惜しかったが終了して二階に逃げた。自室にある、机とセットで買ってもらった回転式の椅子に座り、ズボンのポケットに入れていた佳奈の携帯を取り出す。

「異世界、か」

そう、異世界。佳奈はパラレルワールドと言っていたが、どちらかというとネットで高い頻度で見かけた異世界という呼び名の方が合っていると思う。あたしはたくさんの情報を仕入れ、少しだけ詳しくなっていた。

虚構や実話と謳っているものも含め、読み漁った話は聞いたこともないような、不思議でどこか不気味な話が多かった。特にあたしが引き付けられたのは、一応実話と明記されたかなりオカルトチックな話ばかりが集まったサイトだ。

密室のような状態から忽然と消えてしまった家族、遊んでいる最中に帰ってこなくなった友人、ミステリースポットに遊び半分で入った何組かのカップルの内、行方不明になった半数……。

あたしは読み進めていくうちに背筋が寒くなっていった。それは本当に日常のよくある風景ばかりだった。それなのにある日突然、不条理に人が簡単に消えていくのだ。

全部が全部本当にあったなんて考えてはいない。否、考えたくない。人為的に、或いは神隠しのように消えていく人々。その本人や周りの友人や親のことを思うと胸が痛かった。

――どうか、どうか、あの子が一日も早く帰ってきますように。

胸の前で手を握り合わせ、初めて意識して神に祈る。うちは仏教徒だった気がするが、宗派などは全く知らない。それに頭に描いたのは、まるでイエス・キリストが引き連れていそうな天使の姿だった。

神に祈るなんて馬鹿馬鹿しい。普段はそう思っただろう。先程読んだたくさんの話も、いつものあたしならば鼻で嗤っただろう。しかし今は藁にもすがる思いだった。

そんなあたしの必死さが通じたのかもしれない。深夜、眠れずに

いたあたしに佳奈から電話があった時、あたしは思わず神様ありがとう、なんて今までの自分では到底考えられない言葉を心の中で言った。

十二話目

佳奈は泣いていた。電話越しに酷い嗚咽がやまなかった。こちらでは一日、しかし佳奈のいる場所ではもう一月が経っていたそうだ。あたしはまた自分の無力さを噛み締めさせられ、神様のバカヤロウ、と心の中で罵り、はっとしてすぐに神様嘘ですごめんなさい、と謝った。今のあたしなら簡単に怪しい宗教の勧誘に引っ掛かりそうだな、とぼんやりと思った。

『もう……もう、二度と繋がらないかもって思った……』

苦しげな声に、今日のあたしの気持ちを一ヶ月も続けた佳奈の心労を感じる。しかもあたしとは違い、あの子は全く知らない場所で親も知人もいない。どれだけ追い詰められた状態だっただろうか。

毎日幾度も電話をするがあたしは出ない。もう嫌だと手にした携帯を何度も投げたくなったそうだ（あたしは実際投げてしまったが）。

佳奈の話をただ聞くことしかできず、ひたすら彼女が落ち着くまで相槌と安い慰めを続けた。漸く嗚咽が治まる頃には電話を始めて十数分経っていた。

『由香ちゃん、ありがと。ごめんね』

鼻声で佳奈が言う。あたしは、ううん、と首を振った。お礼を言われることも謝られることも、何もしていない。

悔しさだけが募るが、気付かせないよう明るい声を出す。

「ねぇ、そっちは今どんな感じ？　あの変態に何もされてない？」

そう、このことも不安だった。前に佳奈から話を聞いた時、サイコと罵られていたあいつだけは佳奈に近付いてほしくないと思った。

『変態？　変態って、あのサイコヤロー？　それともロリコンくそじじい？』

……どうやら、以前よりも格段に状況が悪くなったようだ。

「ちょっと待って。サイコヤローは分かるけど、ロリコンくそじじいって誰」
『あれっ、由香ちゃんには言ってなかったけ……。あぁ、ヨーテさんに言ったんだった』
「……ヨーテさんって誰」
『うん、えっと、ちょっと待って。あたし色々由香ちゃんに言いたいことが……。あ、あったあった。これに書いといたんだ。あのねー、カルミに聞いた話なんだけどさー』
「カルミって、誰！」
　我慢できずに怒鳴ってしまう。しかし、このどうしようもない怒りは抑えられなかった。本当に説明のできない子だな、とイライラと彼女に聞く。
「まず、この前あたしに話した内容を思い出して。それから、ゆっくり、落ち着いて話してよ。人の名前出す時はその人はどういう人なのか、どういう風に知り合って、今はどういう間柄なのかちゃんと説明してね。あ、あとどんな見た目してるかも言ってよ。名前だけじゃ絶対ごっちゃになる」
「は……はい」
　佳奈は、まるで尻尾を巻いて怯えているうちの愛犬ケントを彷彿とさせるような声で返事をした。

　ヨーテさんは三十五歳くらいで、現在佳奈の相談役を務めている恰幅のいい男性。
　カルミは十歳くらいのチビ（本人がそう気にしているらしい）だが元気な少女。なんとおっさんの再婚相手の子供らしい。サイコとは十八も離れているそうだ。
　ロリコンくそじじいはおっさんの父親。八十にもなるのに若い女性に目がなく、度々おっさんの家にやって来てはセクハラ紛いのことをしてくるらしい。しかしその歪んだ性格から、おっさんやカルミから煙たがられている、ある意味可哀相な人だそうだ。

「じゃあまだおっさんちに居るの？」
『うん、てかあたしおっさんとカルミに気に入られたみたいでさー、カルミからは姉様って呼ばれちゃうし、おっさんにはもう俺の子供だなって言われちゃった』
　弾む声に溜め息をつきたくなる。今おばさんがどんな気持ちでいるかと思うと佳奈を叱り付けたくなるが、我慢する。彼女だって好きでこうなってるわけではないのだ。
「良かったね。そうだ、あれは？　えーと、確か国の偉い人と会うとか言ってなかった？」
『そう！　明日が会う日なんだよぉっ、もーほんとに緊張する……！　この国の礼儀作法みたいなのはムウルさん……あっ、えっと、お手伝いさんで二十五歳くらいの女の人で、若くて超綺麗で、ロリコンじじいにいつも触られてて、でも全然効いてなくて、あーら虫かしらとか言ってはえたたきみたいのでビシッて引っ叩いちゃうんだよ。凄くない？』
「そ、それは凄いかも」
『でしょ！？　この前なんかさぁ……』
「ところで偉い人は？」
　佳奈の話を途中で遮る。ムウルさん（顔は綺麗だがムキムキな姿を想像してしまった）の話は確かに興味深いが、このままだと脱線して戻らなくなる。佳奈は日常会話でもよく話を脱線させていた。直らないなぁと苦笑してしまうが、しかし今は重要な話の方が先だ。
『あっ、そうそう、そうだった。礼儀作法がさー超むずいんだよ。お辞儀はしちゃいけません、でも目は合わせないようにしなさい、歯は見せちゃいけません、聞かれるまで喋っちゃいけません、背筋を伸ばし胸を張り、ですが威圧的になってはいけません、喋る時は明瞭に、でも決して大きな声は出しちゃいけません……。もうね、本っっっ当にめんどい！！』
「うわー……絶対会わなきゃいけないの？」
『うん、あたしってこの世界の人じゃないし、本当なら施設みたい

なとこに入らなきゃいけないんだって。本来はおっさんみたいなお金持ちがあたしなんかを住まわしちゃ駄目らしいよ。でもおっさんはあたしを養子にしたいって言うし、じゃあこの国の偉い人に口利きしてもらおうってことになったんだ』

「じゃあどうしようもないね」

『でもさぁ、正直この国の偉い人とか全然実感湧かないんだよねー。だけどムウルさんは、心から敬わないと上の方々は絶対にお気づきになります、敬愛なさい、とか言うんだよ。人の心を覗けるみたいって言ったら、同じようなことです、だって。もう、そんなこと言われたら色んなこと考えちゃって何もできないよ。でも偉い人に許可貰えなきゃここから出てかないとならないし……。もー明日が怖い。どうにかならないかなぁ？』

「あんまり気にしなくてもいいと思うけど……」

というか、人の心が覗けるわけがないと思う。ムウルさんはそう言えば佳奈がやる気だして頑張ると思ったんじゃないだろうか。しかし佳奈にはたまたまそれが逆効果になっただけだ。

佳奈にとって元々向こうは過去も未来もなく、ただ、今だけポンとほっぽりだされただけに過ぎない、言ってしまえば他人の世界なのだ。自分に関係ない相手に表面上ならまだしも、心から頭を下げろと言われたらきついだろう。……まぁ、全部想像なんだが。

「じゃあさ、日本の誰かに当て嵌めたら？」

うんうん悩んでいる佳奈が可哀相なので、一応案を出す。

『そっか！　……うーん、そーだな、めっちゃ偉い人……偉い人……あぁっ、天皇！？』

「えっ、そこまでいっちゃう？」

『なるほど由香ちゃんすっごい！　あたし今すぐ天皇陛下に会えって言われたら緊張し過ぎて吐きそうだもん！』

「……それってどーなの？」

よけーしんどいかも……、と佳奈は乾いた声を出した。

十三話目

またしても長時間話し、あたしも佳奈も眠くなったので名残惜しかったが就寝の挨拶を交わして携帯を手放した。通話は一応繋いだままだが、また切れるかもしれない。慎重に見守らなければ。

相当眠かったがあたしは今更ながら風呂に向かい、シャワーだけで済ますと眠る前のあれこれを終わらせ、漸く床に就いたのはすっかり夜が明けていた頃だった。

眠すぎてふらふらする頭で枕元のスタンドを消す。真っ暗になると、すぐに意識が沈んだ。

「由香ちゃん」

全身が赤く染まった佳奈。焦げ茶の髪も、愛嬌のある顔も、褒めると得意げにする白い肌も、全て赤い。窓の近くにいるから余計にそう見えた。

「佳奈……」

あたしは長いこと座っていた椅子から勢いよく立ち上がり、彼女の傍へと急いだ。佳奈の手をとると身体から力が抜け、ぺたりと床に尻をついてしまった。

「大丈夫！？」

慌てて佳奈が机から離れ、あたしを立ち上がらせようとする。しかしあたしはそれ以上の力で佳奈の手を近寄せ、両手で包み込んだ。

――会いたかった。

顔を俯けて包んだ手に額を落とす。所詮夢の中、本物とはとても言えない佳奈。いっそあたしの妄想だったが、それでも今目の前に

いる彼女に縋りたかった。
「どうしたの？」
佳奈が心配そうに声をかける。あたしはそっと首を振った。
「なんでもないよ」
中学生の佳奈を困惑させないようにあたしは顔を上げて笑う。そっと手を離し、ゆっくりと立ち上がり佳奈を眺める。
相変わらず赤い。薄い瞼に覆われた丸っこい瞳は髪と同じで焦げ茶のはずだが、元の色がよく分からないくらい濃い赤。それはまるで燃える火のようで、一層現実感が無い。
しかしあたしには、その方が何故か安心できた。もしかしたら、少しだけ今を……彼女のいない今を……何もできない無意味な自分を……ほんの少しの間だけ、忘れたかったのかもしれない。
「由香ちゃんなんか変だよー」
柔らかく笑う佳奈。機械を通さない佳奈の声があまりに久しく感じる。たった二日前まではほとんど毎日のように聞いていたのに。
「変って……酷くない？」
あたしはわざとむくれた風に返す。そうでもしないと、嬉しくてしまりのない顔になりそうだった。
「真っ赤だし、由香ちゃんじゃないみたい」
「佳奈もじゃん。すっごく赤いよ。宇宙人みたい」
えー、ナニソレーと佳奈は更に笑った。元気な笑顔にあたしも少し笑う。彼女の笑顔を見ていると、とても安心するのだ。
――ふと、喜ぶ気持ちに影が差す。目が覚めたらこの笑顔とも別れなきゃいけないんだ、と。
またあたしは独りになるのかと胸がジクジクと嫌な痛みを訴え、どうしようもない苛立ちと泣いてしまいそうな焦燥を覚える。
「ねぇ、あたしと佳奈はずっと友達だよね？」
居ても立っても居られず、思わず口から出たそんな台詞。普段なら絶対に言わないような言葉だったが、自分の夢という気安さだろうか。言ったあとで恥ずかしさに頬が熱く染まるのを感じた。

「えーっ、友達ってか親友でしょ！？」
佳奈は大袈裟に言い、すぐに子供のような表情ではにかむ。夕焼けで分かりにくいが、きっと佳奈の頬も赤い。あたしは嬉しくて、もう一度佳奈の手をとった。
「……じゃあさ、約束しようよ。」
「指切り？」
「うん」
互いの小指をそっと絡める。佳奈もあたしもどこか照れた顔で笑い合う。
「一生親友ね！」
朗らかに佳奈が言った。
「「ゆーびきーりげんまんウソついたらはりせんぼんのーます」」

「「ゆーびきった！」」

十四話目

パチリ、と勢いよく目を開く。昨日の夢の続きだ……、と呟き、緩慢な動きで身を起こす。

赤い教室、赤い景色、赤い少女。

佳奈の声が頭の中でリフレーンする。

――ゆびきりげんまん。

自分の右手の小指に目をやるが、そこにはなんの痕跡も見つけられなかった。あたしは頭を緩くふる。

――どれだけ寂しいんだ。あたし。

自分の意気地の無さに気落ちしつつ、小指をそっと握り込む。

「ゆびきり……か」

そういえば、と思い出す。

小さい頃――まだ小学生くらいだったはず――佳奈とあたしは一時期ゆびきりばかりして遊んでいた。何かあればすぐにゆびきり。どんなに小さな約束でも、必ず小指を引っ掛けてばかみたいに笑い合った。

例え、約束が守られなくても、そもそも覚えてすらいなくても、そのゆびきりという行為そのものを楽しんでいた。仲良しの証しのようなものだ。

懐かしい思い出は、少しだけ心を暖かくしてくれる。もっと頑張ろう、と自分に言い聞かせる。「由香里ぃー起きなさーい」と母の大きな声が聞こえた。

あたしは登校中、近くの公園のトイレに寄った。そこは不潔で、臭くて、普段なら絶対に入りたくない場所だった。だが、躊躇うことなく足を踏み入れる。

適当な個室に入ると、スカーフを滑るように解く。夏も終わり、

もう長袖のセーラー服を着用しても良かったが、今あたしは半袖を着ている。暑がりなのではなく、少しでも荷を軽くしたかったのだ。
タイル張りの床に衣服がつかないよう気をつけながら着替えを済ましていく。ドアに引っ掛けてある鞄から取り出した服は、いつもなら滅多に着ない、淡い色の、地味な装飾のものだ。これで少しは近所の目を気にしないですむかもしれない。
個室を出て一応手も洗い、少し公園のベンチで時間を潰す。学校の始業時間を過ぎると、漸く立ち上がり歩き出した。

「ここ……？」
向かいに小林さん家、後ろ手には小さめのマンション、近くに古びた押しボタン式の横断歩道。マンションの名前を確認し、やはりここだと確信する。
そこは、なんの変哲もない駐車場だった。車を止めるスペースは１０個ほどしかないが、そんな狭い場所には不釣り合いの大きな月極めを知らせる看板がフェンスに括り付けてある。
印象的な「無断駐車は罰金一万円」という真っ赤な文字をぼんやりと眺め、もう一度駐車場に目を戻す。今は車は三台しか止まっていない。
――噴水なんてどこにもないじゃん。
当たり前の事実に肩を落とす。
そう、ここは佳奈が言っていた、妙な空き地があったという場所だ。佳奈の家に遊びに行く時、あたしは確かに幾度かこの道を通ったことがあるはずだが、全く覚えていない。普段は別のルートから向かう上、あまりにも頭に入ってこない普通過ぎるこの風景。
不審者にならない程度にコソコソと周りの表札を確認し、漸く見つけた幻の場所なのに。
「……はぁ……」
もしかしたら手掛かりが掴めるかも、と勇んで来たはいいが、ありふれた駐車場につい溜め息が漏れる。

取りあえず何もしないよりはマシ、とぐるりとその狭い場所を一周する。
「……はぁ……」
何も無い。
無駄過ぎる努力をしたことにより、一層肩を落とした。
――何か見つけなきゃって思ったのに。
というのも、朝目覚め、早速佳奈の携帯を確認すると、昨日と同じようにぷっつりと通話が切れていて、不安で居ても立っても居られなくなったのだ。
清々しい日差しのもと、駐車場は何も後ろめたいことも隠し事もありませんよと言わんばかりに、ごく普っ通にそこにあるだけだ。夜に来たら違うだろうかとも思ったが、もし毎夜佳奈の言っていた通りの事象が起こっていれば、異世界に行けると評判の観光地になっていないとおかしい。
念のためもう一回りしてみる。ひび割れたアスファルトから雑草が覗いているが、とても掻き分けるほど生えちゃいない。ちょっとした水溜まりはあるが、何度瞬きしても、カッコイイ彫像つきの噴水には見えない。
「……意味ねー」
あたしは少しべそをかきながら帰路に就いた。

カチャリ、と小さな音を立てて開く玄関のドアにひやりとする。母は今はパートに行っているはず、と自分を勇気付け、勢いよく取っ手を引く。
しばし耳を澄ませ、ひっそりとした家に安堵の息を吐いた。母が居れば、家事をする音やテレビの音など何かしら聞こえるはずだ。
あたしはポイッと靴を脱ぎ捨て、廊下に掛けてある時計に目を遣り弁当でも食べるかと台所に向かう。と、その時。
「おかえりぃ」
突然背後から聞こえたいやにのんびりとした声に飛び上がらんば

かりに驚く。見ると、階段の手摺りに背を預け、ニヤニヤしている母がいた。
「っ……た、だいま」
裏返った声で返し、やばいやばいと回らない頭を動かす。
「え……っと、その、早退しちゃった！　気分悪くてぇ……」
「ふーん？」
「……」
これはアウトだ。無理過ぎる。
背中に汗をかきつつ、ごまかし笑いをする。頭の中では、今回はどういう風に怒られるのかと気が気じゃない。どうか、両親に囲まれての叱責や、お小遣いの減額、携帯解約などはありませんようにと必死で祈る。しかし、母は特にあたしに声を掛けるでもなく、横をするりと抜けて台所に向かった。
まさか新たにご飯抜きの刑追加か、と思い、今の自分の残金をざっと計算する。一日一食にしても、五日くらいが限界そうだ。
そろりと何故か足音を忍ばせてあたしも台所に入る。限りなく小さな声で「おかあさーん……」と呼びかける。母は多分聞こえなかったのだろう、特に答えず、冷蔵庫を開けて中をまさぐっている。
あたしはただ突っ立って様子を見守るしかなく、木偶のように動けない。その間も母は流し台を使ったり、コンロを使ったり、レンジを使ったり、また冷蔵庫を開けたりと忙しく、流れるように何かを――きっとご飯を作っている。
確かに丁度昼時だし、母は自分同様お腹を空かしてお昼を用意しているのだろう。あたしはこれ幸いと、はかどらない動きで身体をずらしていき、ゆっくりと母に気付かれないように自室に戻ろうとする。お腹が膨れれば、もしかすると怒りが治まるかもしれない。暫く気配を消していようと布の暖簾をそっとくぐる。ところが、あたしの耳にも届くか届かないかというくらいの微かな音しか立てていないのに、母は何かを察したように急に振り返り「そこに座りなさい」と少し据わった目をした。

――あぁ、やっぱ怒られるんだ……でもお父さんとタッグを組まれるよりはましかな……。
情けない思いで椅子にすごすごと座る。暫くどんよりとした雨雲のような感情を背中にしょって項垂れていると、コツンと頭を軽く小突かれた。
嫌々ながら顔を上げると、あたしは目を丸くした。
「ほら由香里、冷めるから食べちゃいなよ」
「……え？　え？」
「なに。食べないの、それ」
あ、その前に手洗ってうがいね、と流しに促され、混乱したまま言われた通りに実行する。席に戻ると箸を手渡され、いつの間にかあたしの前に用意されていた親子丼を気抜けした顔で眺める。
出来立てのようで、丼からは湯気が昇り、散らされた三ツ葉がとても良い彩りをしている。
あたしは意味が分からず戸惑う。お母さんは怒っているんじゃないの？　なんであたしと仲良く向かい合ってご飯？、と。
「あんた、それ嫌いだっけ」
目一杯に動揺しているあたしに母が言う。親子丼嫌いな人なんているのか、と思いつつ、それでも未だ訳が分からず握らされた箸を中々動かせない。母が軽く溜め息をついた。
「せっかく半熟にしたのに、固まっちゃうじゃん。ゆかはお母さんの頑張りを無駄にするんだ？」
「えっ。や、別にそうじゃないけど」
「じゃあとっとと食べてよ。いつまでも片付けられないでしょ」
「……うん」
相変わらずぼけっとしながらも漸く箸を手にとる。普通よりも小振りで、でも普段使っている茶碗よりも少し大きい丼のご飯を口に運ぶ。
確かに丁度よく半熟で、とろっとしたたまごに甘辛い味付けがよく合っている。

あたしが食べ始めたのを見て、母も自分の分に箸をつける。意図が分からないながらも、なんだか非常にこそばゆく、いつもより早めに食べ進めた。

十五話目

空になった器や鍋を流しで洗う母。あたしはその場から動けず、椅子に座ったままずっと母の背中を見ていた。

「……由香里」

かちゃかちゃと食器が軽く接触する音に混じって母の声を聞く。落ち着けずにいたあたしは、ドキリとして背筋を伸ばした。

「佳奈ちゃん、行方が分からないままなんだってね」

「えっ」

なんでそれを、と言おうとしたあたしを先回りする。

「今日あんたの先生がね、電話くれたよ。『由香里さんがなにか関わっていそうだと思うんですが、親御さんの方から聞いて頂けますか？』だって」

「な、なにそれっ」

言われた内容に驚愕し、すぐに怒りが込み上げる。あのくそ女、と口にしたいのを、母の前だから精一杯に我慢しなければならなかった。

「あたし、違うからね！」

勢いよく椅子から立ち上がって言い放つ。ふと、もしかしてさっきのご飯はあたしを懐柔するためのものだったのか、と思い至る。油断させ、優しく嘘や隠し事を暴く。まるでドラマによくある警察のカツ丼のようだ。確かにあれはただ怒鳴りつけるよりもよっぽど効果的だと思う。しかしやられたあたしは犯罪者と同列なのか、と悔しさと哀しさが一気に胸に飛来し、じわりと目に涙が滲む。食器洗いを中断して振り返った母にばれないよう慌てて俯いた。

「ねぇ、でも由香里……」

「うるさいな！　知らないって言ってるじゃん！」

母の言葉を遮り叫ぶ。もういやだ、もう知らない、と頭の中がぐ

るぐると渦巻き、靄がかかっていく。あたしは俯いたまま歯を食いしばり、涙を堪えた。
「あたしなにもしてない！　どうしてああなっちゃったかなんて分からない！　ヒトの話も聞かずに疑ってばっか、最っ低！　もう話しかけないでよ、アホッ！」
その瞬間、ごつっと重い音が頭に響いた。
「あんたこそ人の話聞きなさいよ！　誰が疑ってるって言ったの！　このバカ！」
あたしは顔を上げ、呆然とした。頭を殴られた衝撃で、零れないよう気をつけていた涙がつるりと頬を滑る。
「あ～あ～泣いちゃって。勝手に悲劇のヒロインしてんじゃないわよ。あたしがあのいけ好かない先生かあんたかどっち信じるなんて決まってるでしょう。電話口で怒鳴り返してやったっつの」
母がテーブルの上に乗っていたティッシュであたしの涙をそっと拭う。
「ていうか、そもそも先生から聞く前に佳奈ちゃんのお母さんから連絡はうけてたからね。それに、あんたが佳奈ちゃんほっといて一人でいるわけないじゃない。いつもあの子になんかあった時は、あんたが一番に駆け付けてたでしょ」
母は次々と落ちてくる涙をティッシュで吸い取る。あたしはされるがまま、漸く涙がおさまり、新しいティッシュを鼻に押し付けられ「ほらかんで」と言われた時も、素直に従った。まるで、自分が幼稚園児に戻ったように思えた。
「あたしは、あんたを信じてるよ。でもね、今日みたいに学校サボったり、この前みたいに夜出歩いたり、そんな無茶すんのはやめなさい。ちゃんと色んな人が動いてくれてるよ。心配してるのはあんた一人じゃないんだから」
あたしは頷く。いらないと思っていた母の優しい言葉が心の底から嬉しかった。
「じゃあ、もう学校を勝手に休むんじゃないよ」

「……分かった」
「イイコね、さすがあたしが育てた子」
ぽんとひとつあたしの頭を叩き、笑う。結局自分なんじゃん、と返してあたしも少し笑う。その笑顔を見て安心したのか、母はまた背を向け食器洗いに戻った。あたしは母が顔を背けた瞬間に笑顔を崩し、のっぺりとした無表情のまま固まる。
――探しても、見つからないんだよ。
言葉は最後まで喉に張り付き、出なかった。

夜。嫌な動悸を感じながらベッドの上の携帯と睨めっこする。
――電話、来ますように。
強く願い、心の中で佳奈の名を幾度も呼びかける。
今のところ、佳奈がいなくなってから二日の間、連続して夜中十二時を一時間ほど前後しながらもちゃんとかかってきていた。今日もそれが通用するかは分からない。あたしはただひたすら、佳奈の携帯の前で祈っているしかないのだ。

十六話目

深夜二時を過ぎた。もう無理なんだろうか、と連日の寝不足で重たくなる頭で幾度も考え、その度にそんなことはないと戒めるように唇を噛む。

そんな作業でなんとか弱気と眠気を散らしていたが、そろそろ限界だったようで、いつの間にかあたしは意識を失っていた。

赤い陽が差し込む教室。見慣れてきた景色に、あたしは少し喜びを感じていた。

――また、佳奈に会える。ほら、そこに――。

「佳奈っ」

数歩だけ離れた佳奈に駆け寄る。彼女はぼんやりと窓で遮られた空を眺めていたが、唐突にくるりとあたしの方を向く。その表情はあまりにも真摯で、あたしは思わず足を止めた。

「佳奈……？」

「電話」

「え？」

「電話、鳴ってるよ」

ぐにゃ、と彼女が歪んだ。

軽快な音が徐々に大きくなっていくように感じた。
がばりと飛び起き、目の前にあった携帯を掴み取る。押し当てた耳に届いたのは、求めていた声だった。
『もしもし！？』
「か……」
『ちょ、由香ちゃん聞いて大発見だよ！』
「な、なに、どうしたの？」
あたしの感動を遮るようにのっけから佳奈が叫び、面食らう。
『あのね、一月に一度なんだよ！　月の色おかしいもん、やっぱり合ってたよ！　月一だけだけどこの日絶対平気だから！！』
「ハァ？」
『もー毎回繋がらないのはうざいけど分かると多少安心だよね！良かったぁ～』
「……えーと、佳奈？」
『あはは、これで邪魔されなくてすむよ！』
「……」
すう、と一つ大きめに息を吸い込む。
「分かんないっつってんでしょーが！！　ちゃんと話してっ！」
『ひっ』
ふぅ、と息をつき気持ちを治め、電話越しだが相手を安心させるよう優しく微笑みを作る。
「佳奈？　あたしよく分からなかったの。ちゃんと教えてね？」
佳奈はごくごく小さな声で『……はい』と半ベソ気味の返事をした。

『えーとぉ、まず、これはずーっと思ってたことなんだけど……ここってなんか月の色がおかしいんだよねぇ。いっつもは紫を薄めたみたいな変な色してんだけど、でもたまに普通の黄色っぽい色にな

って、んで、前回も前々回もその色の時だけ由香ちゃんに電話できたんだよね。
しかもそれって定期的になる色らしくて、気になってたからさっきカルミに聞いたんだけどさー、やっぱなんかあるよね、これ！　カルミがさっきよーやく寝たから電話したら繋がったし、確定でしょ！』
　時々相槌を打ちながら話を聞いたが、やはり分かりにくい。しかしあたしだって無駄に佳奈と長年一緒にいたわけではないのだから、このくらい楽勝だ。
「つまり、一ヶ月のうちに一晩だけおかしな色の月が普通の色になると。で、そん時だけあたしが持ってる佳奈の携帯に、電話できるわけね？」
『そーそー！　でもこっちではデュレ……デュラ……？　テイラーだったけな？　一ヶ月の期間は同じなんだけど、呼び方が違うんだよねー。えーと寒い時だから一月が……んーとマカだかマレイカで、二月がぁ……ザン……ギーだっけ？　……あ、でもここ秋とか春ってほとんどないみたいだし、寒い時じゃ意味分かんなくなるよね……。だからー』
「分かるか！！」
『ひぇっ』
　あたしの一言で、またしても佳奈が怯えた声を出す。しかし構わず続ける。そう、無駄に長年一緒にいるわけでは――……さっき言ったか。
「そもそも、なーんでそんなわかりやすいのに三回もかけるわけぇ！？　一回目で気付いてよ！　少なくとも二回目には気付いて！　どんだけこっちが心配したかっ、もーマジあほみたいじゃんあたしっ。それに、そんなあやふやな横文字並べられても分かるわけないでしょ！？　佳奈ほどじゃないにしても、あたしだって英語苦手なんだから！」
『え、あたしほどじゃないって、ひど……』

「うるっさい！　だいたいねー、あたしはそっちの何月だか知らないけどそんなどーでもいい名前聞くためにこんな遅くまで起きてんじゃないの！　どうにかこっちに戻ってくるんでしょう！？　あたしこのまま佳奈がいないとさみし――」
『えっ？』
「……い、ってほどではないけど、その、帰ってこなきゃみんな心配してるし不安がってるって言ってんの！　……それより、偉い人はどうなったの？　ちゃんとできた？」
　思わず口が滑って恥ずかしい台詞を吐いたことを猛烈に悔やみながら、息を吸って気持ちを落ち着かせ、本来聞きたかった質問をする。すると、佳奈は長い溜め息をついた。
「え、なに。なんかミスった？」
『ちーがーうー。あたしはなんっも悪くないよー。でも……』
「でも？」
『……あー思い出したら腹立ってきた！　あんなの天皇じゃないよ！　笑顔のサービスすら無いんだから！』
「い、いや、天皇ではないでしょ」
『そーだけど！　でも上に立つやつじゃないって！　人のこと馬鹿にして……うームカつくっ』
「偉い人が最悪な感じだったんだ？」
『そー！』
　佳奈の怨みがましい声がコミカルで、段々と込み上げてきた笑いを必死に堪える。しかしあたしの努力の甲斐虚しく、地団駄を踏んでいる音が聞こえた瞬間思わず噴き出した。
『あーっ、笑った！　酷い！』
「あはは、ごめんごめん」
　佳奈の怒り方は子供っぽくていつも可笑しい。かわいいなぁと思いながら、急いで笑いを抑える。あまり笑いすぎると臍を曲げてしまいかねない。
「で、なに言われたの？」

『……言いたくない』
ボソッと一言。当然、そんな風に言われたら気になって仕方がない。
「えーなんで？　どーしたの教えてよ！」
『……ヤダ』
「お願いっ」
『絶対笑うもん。言わない』
「笑わないって！」
『うそだぁ』
いつも以上に口が堅い。こうなったら、とあたしは少し震えた声を出した。
「あたし、佳奈のことが心配なだけなんだよ……？　やっぱりあたしじゃあ信頼できないのかな……」
『えっ……、そんなことないよっ』
「でも話してくれないじゃん……。迷惑だったりする？　あたしなんて……」
『違うよっ。分かった、言う。言うよ！』
あたしはニヤリと口の端を吊り上げた。そう、佳奈はとても騙されやすい。それは長年一緒にいたあたしでも例外ではないのだ。
「じゃあ言って？」
ニヤつきながら、しょぼくれた声を出す。電話はとても便利だ。
『……うぅ、絶対馬鹿にしないでよ？』
しないしないと真剣な口調で言い、うまくいったとほくそ笑む。本当にこういうところは自分でも悪い部分だと思う。直す気は無いが。
『あたしのこと、一目見た瞬間……チビのクソガキじゃないかって』
「え」
『しかもボーズって……男の子だと思われたんだよ！？　ひどいひどいもー折角覚えたお礼のやり方とか挨拶とか全部飛んで、しかも

おっさんはすっごい笑いそうになってるし、あたしまじ泣きそうってか、泣いたよ！』
「……そもそも、佳奈ってそんな男子っぽいっけ？」
笑うとか、そういうことよりもまずそこが気になった。佳奈は少女らしい幼さの残る顔付きだし、肩まで伸びる髪も猫っ毛でさらりとしているし、何より声が高い。いくら変声期前の少年でも、あそこまで高い声は中々いないんじゃないかと思う。
『んー……ここの人たちって女の人はみーんななっがい髪してるんだよね。お尻くらいある。九歳のカルミだって背中まであるし。それが普通なんだって。だからショートのあたしは男の子にみえたんだと思う……。今考えれば……』
「……ショート？　佳奈、肩まであるじゃん」
『え、ないよ？　サイコに切られたもん』
「ハァ？」
『ほら、言ったじゃん。最初サイコに捕まった時、爪とか髪とかとられたって。……言ってないっけ？』
「言ってない！！！」
いや、確か聞いた。聞いたが、そこまで大量にとられたとは思ってなかった。あたしの怒鳴り声に条件反射なのか、酷く震えた声で佳奈がごめんなさいごめんなさいと繰り返す。喚き続けたいのをぐっと我慢し、声を溜め息に変えて吐き出すと、なるべく優しく言った。
「別にいいよ。……そんなに切られたの？」
『うん、最初は後ろなんか、所々ハゲっぽくなっててすごく恥ずかしかった。でもだいぶ伸びたんだけどなー』
く、そ、サ、イ、コ……！
歯をぎしぎしと噛み合わせ、妄想でサイコの急所を踏み潰す。やつれた薄汚い蝿まみれの妄想のサイコは、気持ちの悪い悲鳴を上げた。
「佳奈、もう二度とそんな奴に近づいちゃダメだからね！」

『わかってるよ由香ちゃん！』

そこはさすが長年を共にした友人、あたしの心中を酌んだのか、張り切った声をだした。

十七話目

「で、そのお偉いさんに男に間違われて、泣きながら自分は女だって説明したの？」

『ううん、まだそん時は泣いてない。男って思われて、おっさんが笑い堪えてるのみてめっちゃ傷ついたけど我慢して、いいえ違います、って言ったら、気持ちの悪い声だ、って言われて……』

「あー……それでか」

佳奈は声のことを言われるのは嫌いなのだ。昔、夕方六時からやっていたアニメのキャラに声が似ているとからかわれてよく泣いていた。それが主人公やヒロインではなく、ペットの喋るウサギだったから余計に嫌で堪らなかったらしい。

ついこの前もクラスの子に「メイド喫茶で働けそうだよねー」と冗談で言われた時も、目を潤ませて俯いていたからトイレに連れて行った。

あたしはアニメっぽい佳奈の高い声は可愛くて個性的だと思うし好きなのだが、佳奈はよく低い声を出す練習をしていた。それがまた滑稽で笑えたのだが、笑うと泣くかもしれないのでいつも一生懸命我慢していた。

「でも、佳奈が男だと思ってたからこそでしょ？　その感想」

『そうなんだけど……ほんと今考えると確かにそうなんだけど……。でも泣いちゃって、そしたら向こうが気分が悪いから退出するって言って……おっさんが慌ててた』

「そ、それって大丈夫だったの？」

確か偉い人のＯＫがなければ佳奈は貧に迫った孤児院（想像だが）行きになるはずだ。

『うん……おっさんの頼みだからってそこはちゃんと取り計らってくれたみたい。でもさー、勘違いして悪口言って、謝りもせずに出

ていくって最低じゃない！？　いくらかっこよくてもあれは嫌！』
「かっこいいの？」
佳奈は溜め息をついた。
『うん、あの人見た時にモデルみたいって思った。でもずーっと眉間にシワ寄せてんの。なんか、突然現れる人達は何をするか分からないから嫌いなんだって。失礼だよねー』
それは多分、偉い人は秩序を重んじているんだと思う。上に立つ者にとって必要な要素だと思うが、当事者には酷だとも思う。突然ほっぽりだされて疎まれるなんてたまったものじゃない。
「そういえばさ、施設？　にいるこの世界に来ちゃった人に会えないの？」
『そうそう、会ったよ！　前それを言いたかったのに由香ちゃんがいきなり怒るからぁ』
「ふぅーん……」
『て、ていうのは冗談なんだけどね！』
「……いいけど。で、どんな人に会えたの？」
佳奈が、ちょっと待って、と言った後、カサカサと紙の擦れる音が微かに聞えた。
『えーと……アレッサンドラさんて言う、イタリアの女の人に会ったよ』
心持ち難しげにメモを読み上げた佳奈。まず日本人ではなかったことに驚いた。
「イ、イタリア人とかいるの？　言葉通じなくない？」
『そうそう、あたしもそう思ったんだけど、それが平気だったんだよね！　普っ通に、初めまして、って言われてびっくりしちゃったよ』
「へぇえ、凄いね。ペラペラじゃん」
『そう思うでしょ？　でもさ、話してる途中に教えてもらったんだけど、アレッサンドラさんはイタリア語喋ってるんだって』
「はぁ？」

『ね！　意味分かんないでしょ。アレッサンドラさんが言うには、あたしの方がペラペラのイタリア語を喋ってるって。ちょっと感動じゃない？　イタリア語とか、凄くない？』
興奮しながら捲し立てられる中、急いで考える。
「つまり……つまり、同時通訳みたいな？」
『うん、そういうの！　凄いでしょ、イタリア語だよイタリア語！　あたしも自分が喋ってるとこ聞いてみたい～』
その言葉に、寸時に浮かんだのは、イタリア語……チャオとか、ドルチェとか、ジェラートとか、片言で必死に繰り返す佳奈の姿だった。
「なんか……マヌケっぽい」
『え？　なにが？』
「ううん、別に。で、イタリアの人と他になにか話した？」
『うんとね、アレッサンドラさんの好きな日本食トップスリーとか……やっぱり一番はお寿司だって。他には、イタリアの面白い人の話とか、イタリアに来たら絶対行った方がいい観光地も教えてくれた。ええと……ポルタ・ポルテーゼとか、コンドッティ通りがオススメだってさ』
メモと睨めっこしているだろう佳奈は、たどたどしい言い方で説明する。斯く言うあたしも、耳をただ通り抜けていく名前に苦い笑いを浮かべた。やっぱり、実際に行ってみなければ、中々覚えられない。
『あ、あとねぇ、前にインドの人も一緒だったらしいよ』
「へぇー」
『しかもなんとぉ……その人はぁ……帰ったってさ！』
「どこに？」
勿体振った言い方のわりに、内容は簡略し過ぎて意味不明だった。
『ど、どこにって、もちろんその人の家だよ、多分！』
「へ？　なにそれどういうこと？」
まさかの吉報？　と胸が高鳴る。が――しかし、佳奈のことだか

ら安心できない。
　きっと帰ったってのは、そのインドの人が自分の扱われ方に憤慨して家出し、でもようやく職員総入れ替えで多少マシになった孤児院に妥協して帰って来たとか、そもそもインドとドイツの国名をドの三文字繋がりで間違えてたりとか、持ち上げて落とすやつかもしれない。
『あっ……ごめん間違えた、ドイツの人だった』
「ほらね、やっぱり」
『ん？　なにが？　――ってか、そんなことより、あたしも由香ちゃんとこに帰れるかもしんないんだよ！？　すごくないっ！？』
「えっ……？　か、帰れる？　佳奈が？　ここに？」
『もーっ、だからそう言ってるじゃん！　あっ、ま、まさか嬉しくない、とか？』
　途端に佳奈が沈んだ声を出す。あたしはそんなことに構ってられなくて、思わず、夜中なのに途轍もない大声を出した。
「……っこの、バーーッカ！！！　なんでもっとはやく言わないの！？　サイコとか月の名前とか、そんなのどうでもいいじゃん！！」
『えっ……だ、だって由香ちゃんが聞いてきたから』
「違うでしょ！　そうじゃなくて、順番ってのがあるでしょ！　バカ！　バカナ！！」
『あーっひどい！　それもう絶対言わないって言ったじゃんっ』
「もーだってバカなんだもん、バカカナじゃん！」
『な……ひどい……っ』
　あ、やばいな、と思った時には遅かった。もう微かに鼻を啜る音が聞こえる。多分泣いてる。
　あたしは慰めなきゃ、と思う一方で、安堵のあまりクスリと笑いが零れる。張り詰めていた気持ちが解れ、漸く全身で伸びができるようになったような感じがした。
　耳元でグスグスいう声を聞きながら、あたしはクスクス笑いが止まらなくて、必死に止めようとすると何故か更に大きな笑いを呼ん

でしまう。そのうち我慢できなくて大声で笑いだしてしまった。
『由香ちゃんひどい……っ』
「あははははっ」
『な、なんで笑うのぉ……』
「だ、だって、くっ……ははははっ」
『……ふふっ』
気付くと佳奈も笑っていた。
二人でばかみたいに、涙が出るまで笑い、漸くおさまった頃には呼吸が苦しかった。
「あー、面白くないけど面白かった」
『由香ちゃんやっぱヒドイ……』
――だって嬉しかったんだもん。
とは言わず、ごめんごめんと繰り返す。佳奈は半分呆れたような声でごちゃごちゃと言い返してきたが、喜んでいたあたしには文句に聞こえなかった。
「ごめんってば。ただ、そういう重要なことはもっとはやく教えて欲しかったんだってば」
『あー……あたしがこのこと知ったのがもうだいぶ前だったから、ついさっき気付いた満月のことで一杯になっちゃったんだよねぇ』
相変わらず抜けている。あたしは仕方ないなぁと軽い溜息をついた。いつもなら怒るところだが、とても気分がよくて怒る気にならない。
「あたしはそこまで短気じゃないしね」
そう独りごちると、佳奈が間髪容れずに言った。
『由香ちゃんは短気だよ』
「佳奈は呑気だよね」
少しむかっとして、すかさずあたしも言う。ええ違うよーっ、と叫ぶ声は聞き流した。
「で、帰ってくるっていつ？　どこで？　そもそもどうやって？」
矢継ぎ早に質問すると、佳奈はただ一言だけで返す。

『わかんない』
「えええ……それはなくない？」
『ああでもなんか、おっさんが知ってるかなー？　って感じなんだよ。教えてくれないけど』
「へぇー……」
瞬間、あたしの声が低くなったことに佳奈は気付いているのかいないのか、少し照れたように続ける。
『教えてってせがんだら、口尖らせて、いやだ、って。子供みたいでしょ？　あんまりにも何も言ってくれないからあたしちょっと怒っちゃって、そしたらさ、すっごい目がうるうるなんだよ！　嫁入りするわけでもないのに出ていくとか言うなってかなしそーな顔してさ、なんか、めっちゃかわいかった！』
「ふーん」
『由香ちゃん反応薄いってー！　あたしあんなでかい身体の人がかわいくみえたの初めてかも。頭撫でたくなった。届かないけど』
「……で？」
『で……って……』
佳奈が怪訝な声をだすのも構わず、あたしは明るく言う。
「もちろん、おっさん締め上げて吐かせなきゃね」
『え……っ』
「んで、吐いたらもう二度と隠し事する奴になんか近づいちゃダメだからね？」
『それはちょっと無理だよ由香ちゃん……！』
長年を共にした友人は、空気を読まず、困り果てた声を出した。

十八話目

朝。教室の戸口を引いた瞬間、いつもと違う空気を感じた。しかし特に怯むことはなく、静かにに自分の席に着く。するとすぐに近付いてくる人がいた。

「なぁになっちん」

「月曜日、何で急に帰ったの？」

「体調悪かったんだよ。昨日も来なかったじゃん」

「ふーん……じゃあ今はもう平気？」

「ううん、あんまり治ってない。うつすから近付かない方がいーよ」

「……へー分かったよ」

くるりと背を向ける奈穂子。すぐに走り去って数人で固まっている女子のもとに行き、こそこそと何かを話している。それはいつも仲良くしている面々で、クラスの中でも特に目立つ。

あたしは一つ溜息をついた。今までは気になってしかたなかった他人の目が今では只々うざったい。きっと少し前のあたしだったら「この前はごめん、本当に気分悪くて……。態度悪かったよね……」なんてしおらしく言っただろう。馬鹿馬鹿しい。

はやく授業始まれよ、と思った直後、次は掃除、その後はあの大嫌いな担任の受け持つ教科だということに気付き、ますます憂鬱になった。

担任の意味ありげな視線をかわしつつ、その他怠い授業が終わって昼休憩に入る。各自弁当を広げたり購買に向かったりと騒がしい。かく言うあたしは母のお手製弁当。いつものことだ。

予想していた通り誰からも一緒にと誘われなかったため、一人で机の上に子供っぽいカラフルな弁当箱（母の趣味だ）を置き黙々と

食す。
そういえば一人きりでお昼なんて初めてだなぁ、と不思議な気分に浸っていると、なにか視線を感じる。目を合わさない程度にそちらを確認すると、朝の彼女たちだった。
不快なものでも見るように眉を寄せ、なにかこそこそと囁き合っている。そんなに嫌ならほっとけばいいのに。ふりかけのかかった冷めたご飯をつつきながら考える。なんだかあまり食欲がわかなかった。
それでも今弁当を残して帰ると母に色々と心配されそうで癪に障るから、むりやり口に詰め込む。ご飯の塊で喉が押し広がる感覚に、明日からは何か言い訳を考えて弁当を暫く断ろうと決めた。

授業は一々怠かったが、母との約束を思い出しサボるのはやめた。それに昨日は無断欠席になり（いつもはクラスの誰かに休むことを伝えるようメールで頼むのだが、すっかり忘れてしまっていた）担任にちくりと厭味を言われたので、半分意地で机にへばり付いた。
しかしそれも漸く終わり、今は帰り支度を済ませたところだ。とは言っても家に直行はしないが。
教室を出ようとした時に、何気なく後ろを振り向いた。するとちょっとした女子の塊があり、そこに居る面々はあたしを横目で観察していた。
気付いたのは昼だったが、朝からずっとこうだったらしい。授業合間の休憩中、粘着性のある視線がいつも舐めるようにあたしを観察している。男子はその女子に気圧されてか、今日はそちらも一言も交わしていない。そもそも、男女比率が九対一のほぼ女子ばかりの学科なので仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。彼らからの視線もしょっちゅう感じていたが、特に干渉する気はないようだった。
この状況にあまり恐怖は感じていないが、心配はしている。靴を隠されたり持ち物をカッターナイフでズタズタにされたりなど、い

かにも定番なことをされそうなのだ。正直、金が掛かることはよしてほしいのが心境だ。
まあ、だからと言って「物はやめてね」なんてお願いできるわけもないので、とりあえずは様子を見ることしかできない。あたしにできることと言えば、教科書など、持って帰れるものはなるべく鞄に詰め込むくらいだ。おかげで右腕がいつもの倍辛かった。

チャイムを押そうとして躊躇する。とあるマンションのドアの前、よく訪れていたの場所なのに今はとても入りにくい。なんだかここ周辺の空気が重苦しい気がする。でも、きっとそれはあたしも同じなんだろう。たった一人、少女がいなくなっただけで全てが簡単に歪んでしまう。
思い切りが悪くうじうじと玄関先で考え込み、数秒ののち、溜息をついてもう一度チャイムまで手を持ち上げた。
「なんか用？」
びくりと身体を揺らし、慌てて振り返る。一瞬誰もいないかと思ったが、視界の端に影があった。
「健次……」
佳奈の弟は、相変わらずチビだった。

玄関を開けてもらい、中に通される。健次はすぐに冷蔵庫に向かい、お茶でも出してくれるのかと期待したが、ペットボトルのオレンジジュースを自分でラッパ飲みしただけだった。
「あんたおばさんに怒られるよ？」
「別に平気だもん」
生意気にそう言う少年に、むしろ怒られろ、と嫌な念を送ってしまう。健次はペットボトルを冷蔵庫に戻し、結局あたしにはなにも出す素振りがない。あまりにも気がきかないので「あたしにもちょ

ーだい」と言うと、冷蔵庫の中のペットボトルをそのままこちらに持ってきて、あたしの前にドンと置いた。
一気に飲む気が失せ、もういいからと手で押しやってからきょろきょろと周囲を見回す。
「おばさんは？」
「今仕事」
「あ……そっか」
学校が終わってからすぐ来たから、まだ夕方の五時を過ぎた頃だった。おばさんの仕事終わりは大体夜の九時辺りのはずだ。いつも朝早くから佳奈と健次のお弁当を作り、周辺家事を済ませてから仕事に急ぐのだという。佳奈は頭が上がらないと言っていたが、それを聞いた時、なんだかあたしも同じ気分になった。
「なあゆかり」
「ん？」
「あのさー……」
「なに」
なにごとか言い淀む健次に、本当に小さいなー、と口にはあまり出せないことを考える。小学三年生ならばみんなこのくらいの背丈なのかもしれないが、おばさんも佳奈も小柄なので健次も背は伸びないかもしれない。それに顔もおばさんの面影があるような気がする。
そういえば佳奈の顔はおばさんにあまり似ていない。もしかしたら父親似なのかもしれない。それなのにおばさんよりもちっちゃいのは父親も身長が低かったからだろうか。だとすると、やはりこの少年のこれからは絶望的かもしれない。
この上なく失礼でくだらないことをぼんやりと考えていたが、次の健次の言葉を聞いた瞬間、それらは簡単に吹き飛んでいった。
「ゆかりは、姉ちゃんのことやっぱ知らないよな……」
聞こえるか聞こえないか、というくらいの声量で健次がぽつりと言う。

「う……うん、知らない」
「そっか」
咄嗟に嘘をついた。その嘘に健次はぷいとそっぽを向き、呑気に欠伸をしてみせた。ゲームしようかな、と呟きながら。
「健次……」
あたしの情けない呼び声に健次はいたずらっぽく笑ってみせる。
「ゆかりもする？　これ母ちゃんが買ってくれた」
「……格ゲーはちょっと」
「つまんねーの、こんなんもできねーの？　だっせー！」
ニヤリと笑いながら憎まれ口をきく。それはどう見ても明らかな作り笑いだった。胸の奥にずきりと鈍い痛みを感じる。
――小学生のくせに、なんで無理してるんだろう。
子供の我慢ほど辛いものはないよ、と小さい頃に父が吐露していた。確か母がなんだったかで長い間入院していた時に、電話で疲れた顔をして言っているのをあたしはこっそり聞いた。
隠していた気持ちを知られていた恥ずかしさを強く感じ、いたたまれなかった。でも、分かってくれていたのがとても嬉しかったのも覚えている。
「健次、ごめん――さっきの嘘だよ」

十九話目

嘘、と。気付いたらそう言っていた。健次は「は？　なにが？」と怪訝な顔をしてあたしを見ている。まあ、いいか、と半分諦めの気持ちで続ける。

「あたし、佳奈がどこに居るか知ってる」

「えええっ！？」

「あー、でも正確にはどこってのは分かんないや。だけど佳奈は元気だよ。ぴんぴんしてる。多分」

「はぁ？　どーいう意味だよ！」

健次の混乱でいっぱいの顔が可笑しくて、笑いそうになるのを耐える。あたしは意外と笑い上戸なのかもしれない。

「実はね……」

長い長い説明を始めようとした時、ただいまー、と壁一枚向こうの玄関で声がした。ドキリとして口を閉じると、ガチャリと部屋のドアを佳奈の母親が開いた。

「……あら、由香里ちゃん。来てたの？」

「あ、はい。お邪魔してます。お仕事、いっつもより早いんですね」

「……みんながね、気を使ってくれるのよ」

曖昧な笑みを浮かべるおばさん。気を使う……言わずもがな、佳奈のことだろう。前よりも心持ち小さくなったおばさんの背中は、まるで重い荷物でもしょっているようで、見ていられない気分になる。

「おばさん」

「うん？」

「あの、大丈夫……？」

あたしの問いは答えの分かりきっているものだった。おばさんは、ファンデーションでも隠しきれない濃い隈のある目元を微かに歪め

た。
――ああ、どうにか彼女を安心させたい。
先程閉じた口をもう一度開く。本当はもう少し証拠を揃えてから……夜になって電話が繋がってから、話をしたかった。健次はまだ小さいからおいといて、おばさんにだけは一時も早く佳奈の声を聞かせてあげたかった。
「おばさん」
居間とはカウンターで仕切られた、小さめの台所にあるテーブルに鞄と夕食用だろう買い物袋を置き、ゆっくりとこちらに目を向ける。小さく微笑みを作ってから、どうしたの、と彼女は言う。
「あの……あの、佳奈のこと、なんですけど」
「……なぁに？」
おばさんの微笑みがより小さくなる。でも返事を発した声は思った以上に明るい。
あたしはなぜか……違和感を感じた。
「えっと、佳奈の場所、よく分からないんだけど、でも、分かりました。……じゃ、なくて……ええっと……どう言えばいいんだろう。佳奈とは毎晩話しているんです、でも会えなくて……」
尻窄みになっていく語尾をなんとか持ち直そうとなんども大きく息を吸って、でも出ていく言葉は要領を得ない、粗末なものだった。おばさんは微笑みを浮かべたまま表情を崩さない。
それを見ているとなぜかよく分からない居心地の悪さを感じ、ますます思考が覚束ない。少し――気持ちが悪い。
不意に、おばさんがこの場に不釣り合いな高い笑い声を上げる。
「いいのよ、由香里ちゃん」
「……え？」
「無理しなくていいの。嘘なんてつかないでいい。そんなことをしたって、後でお互いに虚しくなるだけなのよ」
「ち、違うんです！」
思わず大きな声を出した。しまった、と思ったがおばさんは微笑

んだままだった。
　とにかく誤解を解かなければ、と急いで捲し立てる。
「本当なんです。本当に佳奈はまだ元気で……あっ、まだっていうか、これからも元気です――多分。あーじゃなくって、あの、佳奈は今……日本にはいなくって」
　さすがに『異世界』という単語を言うのは憚られた。おばさんは相変わらず微笑んだままで、買い物袋を持ったままゆっくりとした動作でカウンターの外側に回る。
大丈夫かな、と少し不安にかられるが、黙っている内は聞いてくれているだろう。
「その、……そう、外国！　外国にいて、イタリアの人とかいて、親身になってくれる人もいて、なんとかやってるって。でもそこから日本に帰るのがなかなか大変みたいで……。あ、今はすごく優しい人にお世話になってるって、だから大丈夫だって！　それに夜になれば電話が通じるんです。あとは帰る方法さえ分かれば……」
「――なにを言ってるの？」
　底冷えするような声があたしの話を遮る。おばさんはとても儚げに微笑みながら、声はひどく強張っていて、まるで刃物を突き付けられたような気分になる。あたしは口を開けたまま固まり、次の言葉を見失ってしまった。
「外国？　それじゃああの子は誘拐でもされたって言うの？　パスポートも持っていないのに、外国に？　それに電話ができるのならまずは家に――私の所に、かかってくるはずじゃない。……ねぇ由香里ちゃん。おかしなことを言わないで。あなたまで……私たちに酷いことをするの？」
　つうっとおばさんの頬を涙が滑る。あたしは動けないまま、頭の中だけは酷く混乱していた。解決策どころか、現状を理解することができない。ただただ黙って次々と伝うおばさんの涙を見るだけだ。
「もう……もうたくさんよ。私にはもうなにもないのよ？　お金だってもうないわ、本当よ……。お願いだから困らせないで……。お

願い……」
　ゆっくりと崩れる彼女を呆然として見つめる。灰色のタイトスカートにぽつぽつとシミができていく。
　数秒ほど脳が停止していたが、はっと我に返って、なんとか弁明を試みる。
「あの、違うんです、本当なんです。あたしの妄想とかじゃなくて、佳奈は本当に毎晩電話をくれて……あ！　あの今晩泊まっていいですか？　そしたら信じて貰えると思うから！　ていうかあの、多分なんですけど……でも絶対今日も電話してくれるって佳奈が……。あ、でも一回家に帰って、あの子の携帯を取りに……」
　グシャリ、と聞き慣れない音を聞いた。ちょっとした衝撃を腿に感じ、頭にはその何百倍もの衝撃を受ける。おばさんは右手を振り上げていて、あたしの左腿のスカートの上には潰れてくちゃくちゃになった卵の中身と殻の一部が張り付いていた。
「出ていけっ！！」
　右手が振り下ろされ、今度はあたしの頭上すれすれを飛んでいき、背後でパキャッと殻が砕ける音がする。
　おばさんの右手は左腕に絡み付いたままの買い物袋に吸い込まれ、また振り上がる。
「ゆかり！」
　あたしの鞄が引っ張られ、今まで忘れきっていた存在に気付くと半分もつれた足で小さな背中に付いていく。玄関まではすぐで、履き慣れたローファーに足を突っ込み、健次は三和土に出ていた釣り合わない大きさのミュールを足に引っ掛け急いで外に飛び出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5497o/

あの子が消えた日

2011年7月25日03時33分発行